
come with tomorrow ~ **番外編** ~

結里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

come with tomorrow（番外編）

【ノート】

N5994N

【作者名】

結里

【あらすじ】

これは番外編です。本編を読んでないとわかりませんので、あしからず。。。

本編

<http://ncode.syosetu.com/n2078n/>

【神崎惣一】

綱渡りをしている気分だった。もう長いことそんな心理状態だった。

均衡を保つ為に必死だった。

それは家族の和なのか、自分自身の精神調和なのか、それとも弟に人としての尊厳を少しでも奪還させるためなのか……。

自分は中心人物キーマンになっていると思っていたんだ。

だからこの状態を解き放つのも俺の役目だと思った。

だから……。

(だから俺は……)

* * *

しばらく面会謝絶状態が続いた。でもそれは俺の体調のせいだけではなく、警察の管理下の元にいないといけないためだった。

意識を取り戻し、何とか起き上がれるようになった今も、表に警官がいる。

自業自得と言えはそれまでだが、家に帰るのはかなり先になりそうだ。

「まだ顔色がよくないな」

そう言いながら現れたのは池田浩一郎という刑事だ。

通常ならば警察署で行うはずの取調べを俺は病室で受けた。

もう隠しても無駄だと思い、すべてを話した。いまさら隠してもどうにもならない。

会話の中でこの人が悠汰の知り合いの刑事だと知った。

だけど彼は俺のことも気遣っていたようだ。すべて聴いたあと、最後にした会話がそう思わせた。

「君はまだ殺意を持っているか？」

「正直なところ……」

どう答えようか一瞬迷う。

「よく、わかりません。……長い間、俺は両親を殺すことばかり考えてきたんです。今から思えば他の解決方法もあったのに、子供のときからそのことばかりが頭を占めていた。思い始めたころはまだ力もなくて、きつと失敗するだろうってことが解っていたんです。だから可能になるまで待つて、俺は行動に移した。でもまだ二人とも生きています。そのことには正直、まだ、憤りを感じています」

池田さんはじつと聞いていた。目を逸らさずに。

「しかし全てを捨てて、悠汰をもつと苦しませてまで、そんなことをする事にどれだけの意味があるのか……。俺にはわからなくなってきたんですよ。あいつがまさかこんなに必死に止めてくれるとは思わなかった……」

最後のは心髄で感じたことだった。

どれだけ脅しても、撥^はねつけても悠汰はやってきた。弱くて怯えている弟しか俺は知らない。何度も驚かされた。

「そうか」

池田さんの答えはこれだけだった。少し意外に思う。

人生の経験を活かした話だとか、悠汰よりの回答が帰ってくるかと思っていたからだ。大人なりの切り口で。

「解放したかったと君は言ったそうだが、それは出来たのかな？」

さらに池田さんは突いてくる。

「できているはずないでしょう。一度は悠汰までもを殺してしまおうと思った。死ぬことが悠汰にとっての解放に繋がるなら、俺にはそれも覚悟をしなければならぬ事だ……。けれど父は未だに悠汰を遠ざけている。聞きました。この病院に来ることを父は許さないと聞いたそうですね」

「……………」

目が覚めて、そこにいた看護師にまず聞いたことだった。現状を聞くなかで、弟はどうしているかと聞いた答えがそれだったのだ。

その時はすぐに怒りがこみ上げた。すぐにも殺しに行きたかった。

父親は一度も面会に来ていない。さすがに来れないのではないかと思う。どういふ心情でいるかは不明だが、来たところで俺は追い返すだろう。

「そうではなくて、俺は君が解放されたのかを聞いたんだがな」
池田さんのため息混じりの独白に、僅かに面食らう。

この人は悠汰のことを気にしていると思ったから、そのことだと信じて疑わなかったのだ。

俺はこれで解放される。

確かにあの時そう言った。全てを無茶苦茶に壊したら、少なくとも今より悪くなることはない、そう思った。

それぐらいの変化を求めたのだ。

「俺の解放は、悠汰が解放されることですよ」
それも嘘ではない真実。

では、まだということか、と池田さんは呟いた。

* * *

何度か痛みが続いた。薬があまり効かない。

痛みは苦しさを引き起こし、やがて意識を朦朧もっろうとさせた。

感染症を引き起こし、熱をもったときは本当に危なかったようだ。痛みが続くとその都度、悠汰のことを思い出した。

悠汰はいつも痛みを耐えていたんだ。両親の暴力によってつけられた傷はいつ見ても痛々しかった。どれ程の痛みなのか、今の自分と比べてどれくらいマシなのか、俺には分からない。

だからこそ放っておけないのだ。

(解放させてやりたかった…)

笑顔を取り戻したかった。

いつからか笑わなくなった悠汰。俺に浮かぶのはいつも苦しそう

な表情だけだ。

何度かそんな表情にうなされて目が覚めることがあった。その度に泣きそうになる。

悠汰は今、笑っているだろうか？

その事が一番知りたかった。なのにあいつは来ない。

こんな状態にも慣れて痛みも軽くなつたとき、母親の意識が戻ったことを看護師から聞いた。

母親の命が尽きるか否かで俺の刑も変わってくるだろうと池田さんが言っていたが、だからといって素直に喜べなかった。

まだ、複雑だったんだ。

何の変化もなく日常が戻っていく気がした。

そんな頃、浅霧世羅がお見舞いに来てくれた。

一度は協定を結んで同じ世界を見た彼女は、俺とは対称的に清々しい顔をしていた。

「思ったより物々しいな」

辺りを見渡して呟く。

見舞い客もしくは面会人がくると、外にいた警官が中に入ってくる。

それは今まで来てくれた友人たちも同様だった。事件に関する会話をするのか聞いているのかもしれない。池田さんはそれも最初のうちだと言っていたが、いつまで続くのだろうか。

例外なく世羅の後ろに控えるように警官が立つ。

世羅は持ってきたフルーツバスケットを俺の前のテーブルに置いた。

「もう食べれるのか分からなかったんですが」

「ありがとう。後でいただきますよ」

本当はまだ食欲がなかったが彼女の心遣いが嬉しかった。彼女は傍らに予め用意されている椅子に腰を落ち着かせた。

「あれからどうだ？」

世羅の両親は逮捕されたと聞いていた。

彼女のその後はすごく気になっていたことだった。

「すごく住み心地が良いです。一時の安息だとはわかっているが、私は一人の方が落ち着くみたいだ」

「強いな」

「いえ、弱いからこそ一人になるんですよ」

そう言いながらも、世羅は憑き物が落ちたように明るくなっていた。

俺より先に高見に行ったようだ。少しだけ置いていかれた感があるのは、やはり俺が弱かったせいだろう。

「そういえば、あれからお祖父様がよく気にかけてくれているようで、よく話しかけられるんです。なぜだろう？」

すごく納得がいけないというふうに、世羅は首を傾げた。

素直に喜べばいいのに、と思う。彼女の性格上、理由をはっきり言わないと伝わらないのだろう。

「良かったじゃないか」

「ああ。…いや、私の話は良いんです」

頷きそうになってから世羅はふと話を変えた。

「惣一さんのことが重要だ。身体の調子はどうです？」

「俺は大丈夫だよ。それより君の話の話を聞かせてくれ。功男さんは何と言ってくれたんだ？」

なるべく自然に話を戻した。

「お祖父様は困ったことがあったら何でも言いなさいと…。そうだと神崎と話したとき、彼は私を気遣ってくれていたと教えてくれました」

「悠汰が？」

「どうやらお祖父様は神崎に弱音を吐いたそうなんです。内容までは頑がんとして教えてはいただけなかったが…。そのとき神崎は親身になって聞いてくれた、と……。本当だろうか」

どこか半信半疑な様子で世羅は呟く。

そうだったのか。

いつの間にか悠汰は成長していたんだな、と感慨深く思う。離れている間にそういうところが増えていたのだ。

もったいない。ちゃんと接しておけばよかった。

「君はまだ悠汰の事が嫌いなのか？」

世羅の想いはすべて聞いていた。Riverで会ったいたときに、世羅を通じて悠汰の話聞くのが嬉しかったから、どんなことでも言いから話してくれと頼んだのだ。

「神崎には酷いことをたくさんしてしまった。私の醜い嫉妬のせいで」

目を伏せながらもしつかりとした口調で世羅は語る。

「あの男と同類だから嫌いだと伝えてしまったけれど、神崎は何もしてこなかった。本当はわかっていたんです。あの時神崎がいたことで、私はあの程度で済んでいたことを。ためらうことなく神崎は飛び込んできてくれた。同類じゃない、ちゃんと優しさをもっている」

「悔やむことはない。ああいう場面では仕方ないことだ」

言えた義理ではなかった。俺も何度となく悠汰を傷つけることを言ってしまった。

あいつは俺が気を失う直前に、拒絶をしてきたことを謝ってきた。そうではないのだ。そうなるように俺が仕向けただけのことなのだ。

「神崎とはあれから……」

躊躇いがちに世羅が口を開いた。世羅も知っているのだろう、親父の情けない命令を。

「会ってない。言いつけを守って来ないつもりのようなだ」

「まったく、あいつは……。また惣一さんに心配かけるようなことを……」

「不甲斐ない兄のことなど切り捨てて、楽になれるならそれも有りだと思っけどね」

もっと適当に生きればいい。こんな家族を捨てて新しい人間関係を確立すればいいのに。

悠汰を見てると歯痒い気持ちが生まれてくるのも、また本音だった。けどあいつは捨てなかった。ちゃんと家に帰ってくるし、今でも親の言いなりになってる。

「根が、真面目なんでしょう。自分を誤魔化さない。一番欲しいものから逃げないんだと、私は思います」

「一番ほしいもの？」

「家庭のぬくもりです」

世羅の言葉に意表をつかれた。

「私も似たような境遇にいたから解る。いくら突っ張っていても子供の頃から抱いていた想いはなかなか捨てられないものです。私はもう踏ん切りをつけたのだけれど……あいつは、そうはしないんだな」

遠い目をして世羅が言う。

腑に落ちる、内容だった。

「あいつ……」

「惣一さんは神崎に会いたいですか？」

突然、まっすぐ見つめられて問われた言葉に、俺は少々言葉を失くした。

受け身でいたためか、まったく自分の気持ちを考えてなかったのだ。来るか来ないかは悠汰の意志で決められる。自分の気持ちなど後回しにしていた。

「そう、だな。……会えるものなら、会いたいよ。すごく」

言葉にしてみると尚更実感した。悠汰の今が気がかりだったこともあるが、やはり俺自身が会いたいのだと思う。

「分かりました。玲華に言います。玲華の言葉なら神崎は来るでしょう」

そこでふつと世羅は笑った。

「単純だからな」

西龍院玲華のことは、話だけなら世羅からよく聞いていた。実際には二度だけ会った。あの地下室とこの病院で。

どこかすっ飛んでいて、だけれど品をも持ち合わせた不思議な女性だ。

「そつかもしれないな」

世羅は潔かった。一度は嫉妬に駆られながらも、そんな申し出をしてきてくれた。

二人が近づくのは嫌だろうに。俺のためになんだ。

嬉しいけれど、素直に喜べない自分がいた。胸が、少し痛んだ。

* * *

それから数日経って、本当に悠汰はやってきた。

しかしノックがして、まず俺の目に入ってきたのは玲華さんだった。

「失礼しまーす」

どこか呑気さを含む口調で彼女が先に顔を出す。

扉が開くと、すぐ後ろに悠汰がいた。左右に首を動かしキョロキョロしている。親父を警戒しているのだとすぐに気づいた。

本当に悠汰は分かりやすい。表情で考えることがだだ漏れだった。それからすぐに後ろ手で扉を閉ざそうとすると、警官に止められていた。

「なんだよ？来んなよ」

警官にまで喧嘩を売ってる。

「駄目よ悠汰。この方もお仕事なんだから」

「他人の兄弟の語らいを盗み聞きする仕事かよ」

「池田さんに言われたでしょう？話聞いてないんだから、もー」

「俺は聞いてねえよ、玲華が連絡したんだろ」

「しょうがないじゃない。真鍋さんの車の中で、誰かさんが大丈夫かな？とか、見つかって更にひどい目にあつたらどうしようとかさんざん気弱なこと言うからさー。様子を先に聞いてあげたんじゃない。その誰かさん携帯もってないし」

「悪かったな！だからって兄貴の前でバラすことないだろ！」
挨拶もしないでずかすかと入ってくるあたりは、間違いなく悠汰
だった。

無視されてるのかも、と一瞬危惧したが最後の台詞でこちらを見
た。

「あ、兄貴。元気？」

やっと弟に笑みが戻る。

あー、笑っていたんだちゃんと。俺が見ていなかっただけで、
笑顔を失ってはいなかったんだ。

それから、俺は見逃さなかった。

言い合いしながらも二人の手がしっかりと握られていることを。

(幸せを、つかんだんだな)

俺より早く。いや、家族の中の誰よりも一番先に脱したんだ。無
秩序な暗闇から。

「ああ、問題ない」

嬉しくなつて俺も笑う。

「お兄様、足りないものありませんか？」

玲華さんも完璧な笑みでそう言ってきた。

お兄様つて……。

慣れない言葉を聞いた。

「おい、何だよその媚売り」

「失礼なこと言わないでよ。当然の思いやりでしょ！」

「だーかーらー！久保田さんにはタメ口で、なんで兄貴だと敬語な
わけ？そこが気になるんだけど！」

「当然の流れでしょ！久保田さんについては前言ったし。お兄様は
……。だつてほら、いつか本当にお義兄様になるかもしれないじゃな
い？」

「なっ……」

悠汰が真っ赤になつて絶句していた。

なるほど。それぐらい彼女は想ってくれているのか。受け入れて

いる繋がれた手を見てみると、悠汰もまんざらでもないらしい。

それも悪くない、と思えた。

「彼女の明るさが取り込まれたら、うちも変わるかもな」

自然に本音が口からこぼれた。

「兄貴までなに言ってるんだよ！兄貴は知らないから！こいつ母親と大喧嘩したんだぜ！」

「それは………見てみたかったな」

「やめるよー！俺はもう見たくないって！あんなん毎回されたら地獄だ！」

「なによ、その言い方は！感謝してたって泣きながら言ってたくせに」
「泣いてないだろ！そこでは！」

悠汰はもしかしたらもう解放されてるのかもしれない。

人が自然にする喜怒哀楽を、ちゃんと彼女にはみせているようだ。いつまでも怯えたままではない。

俺も、考え方を変える必要があるようだ。

二人が帰ったら、さっそく池田さんに言おう。

もう殺意はないと。もう、そんな必要はなくなったのだと。

そう思いながら、二人の明るい　悪く言えば騒がしい
言い合いを聞いていた。

【高田秀和】

ぼくの名前は高田秀和。西龍学園に通う高校一年生です。

父は西龍院家で庭師をしています。

すごく広い庭園を管理するのは大変だとよくぼやいていました。

最近は暑いから作物が弱って大変だそうです。

そんな父について、子供のころからよく仕事場に着いて行くようになりました。

そこで出逢ったのが、一人娘のご令嬢、玲華さま。

西院院家はよく人が集まる家でした。他の、やはりお金持ちの子供たちもよく親に連れられてきていたんです。玲華さまは、そんな子たちとも分け隔てなくぼくに接してくれました。

だからぼくはなにかお返しがしたいと思うようになりました。

だけど西龍院家にはちゃんと、それぞれ玲華さまに仕える人がいるので、ならば学校ではせめて役に立ちたいとあのお部屋に行かせてもらおうように頼んだんです。

もともと、家は共働きで母も家にいなかったので、ぼくが家事をする役目でした。

なかなか大変だけどやってみると楽しい。ぼくの手によって綺麗になっていく部屋とか、調味料とか隠し味を工夫して作った料理を美味しいといって食べてくれる人とかを見ると、とくにそう思います。

玲華さまはなにを思われたのか、最近料理に興味を惹かれているようです。

夏休みに神崎さま含む三人で料理をしました。

ぼくんちの狭いキッチンでギョウギョウになりながらする作業は、窮屈でもどこか楽しかったです。

もともと器用な玲華さまはその成長がめざましく、だんだんコツをつかまれています。ちょっと繊細さが足りないかな……とは口が裂

けても言えませんが…。

* * *

「そついえば、ヒデー」

天ぷらの下地をかき混ぜながら玲華さまが話し出しました。

「なんですか？油が怖いとかは聞きませんよ」

「そんなこと言うわけないじゃない」

そつでした。玲華さまは普通の女性なら怖がってしまうような、魚を捌くことさばもブツサリ……いや、あつさりとやり遂げたのです。

「じゃなくてさー、あんたの好きな子って誰？」

バサツと天ぷら粉を落としてしまいました。ああああ！まだ半分入っていたのに！

「なに？そんな奴いんのか？」

真剣に分量を量っていた神崎さまが反応しています。

「いるらしいのよ。でも恋愛よりあたしたちという方が楽しいんですって」

「なんだそれ？どこまでも妙な奴だな」

「神崎さまに言われたくありません」

「どういう意味だ、てめえ」

うつつ。神崎さまが睨みを利かせてきました。

神崎さまはどこか不器用な人です。誉めても、ちょっとだけ反抗してみても怒られてしまうんです。

でもぼくは知っていました。本当は良いところもたくさんあるって。なによりあの玲華さまが好意をもたれたのですから。

「ちょっと粉を片付ける振りして無視しないでよ」

「いいじゃないですか。ぼくのこと」

「協力してあげるって言ってるのよ」

嘘です。玲華さまが不敵に笑われています。こういうときは、面白がってとんでもない事をやらかすんです。長年近くで見ている学習

しました。

「俺も協力してやるよ、誰だよ」

「やめてください！いりません！」

かなり本気で怒鳴ってしまいました。珍しく余裕がない自分に驚きます。

でも、確かに言うわけにはいかなかったんです。

「もしかして……」

ぼくには本気の怒鳴りだったのに、神崎さまはちっとも怯まないうで考え込まれてます。

そして恐る恐る言いました。

「玲華、とか？」

「やめてください！違いますよ！」

「ちよっとーその言われ方ムカつくー」

あああ、玲華さまの睨みの方が怖いです。

ぼくなんか怒ったって、二人とも全然気にしていなかったようです。それはそれでいいんですけど、カラ回っている自分がなんか哀しいです。

「いいですか！二度とこの話をしないでください！じゃないと料理教えませんからね！」

ぼくにとつての最後の武器です。二人は仕方がないというように引いてくれました。

やれやれ、です。

* * *

玲華さまと神崎さまがお付き合いをされたことは、なんとなく雰囲気であってしまいました。だから神崎さまが一瞬イヤな想像をしてしまったことも。

だけと言うわけにはいかないのも事実で……。

玲華さまのことは子供のときは確かに憧れました。同い年なはず

なのに大人びたことをいう彼女に、尊敬の念を抱いていたんです。でも所詮高嶺の花。ぼくでは釣り合いがとれないと悟りました。

そんなことを気にする玲華さまではないとは思うのですが、ぼくがそう感じてしまったんです。それでもう駄目でしょうか？

そんな楽しくも焦らせた夏休みも終わり、学校が始まりました。相変わらずぼくは玲華さまの部屋にいます。

ずっと離れがちだった世羅さまも、何もなかったように隣に座っていらっしやいます。

正直なところ、噂ではいろいろ聞いていました。喧嘩をしていたことを。でもやっぱりお二人は一緒にいられるのが自然ですね。

「ヒデ、明日冷蔵庫が来るからね」

来て早々、とつても嬉しそうに玲華さまが言いました。理事長は拒否していたのに……。どうやって交渉したのでしょうか？……突っ込むのはやめておきましょう。ええ。

「でしたら氷をいただいてくるのも今日が最後ですね」

「そうね。ありがとうヒデ。おかげであっついときにあっついモノ飲まなくてすんだわ」

「あ、では冷たい飲み物を補充しないとイケませんね。これだけは外せないってものありますか？」

「オレンジジュース！もちろん100%のね」

「はい。世羅さまは？」

「硬水を」

「はい。神崎さまは？」

いつものソファに寝転びながら神崎さまは本を顔に置いて眠っていました。でもそれをちよつと持ち上げた辺りを見ると、やっぱり寝た振りだったみたいです。

「その金はどこから出てるわけ？」

「理事長です」

「ふうん」

「やだ、なに気にしてんの。いいじゃない本人が良いよって言った

のよ」

「ふうん……。ま、俺にはどうしようもないけど」

神崎さまがおっしゃりたいことはちよつと解りました。いくら相手がお金持ちといえども他人の個人的なお財布から出費されているお金です。

この状態を当たり前だと思つてはいけません。

「出世払いということ、いまは甘えておきましょう」

「おまえ…わかつてんだな」

神崎さまにすぐ驚かれました。失礼ですよ。

だけど玲華さまと世羅さまはちよつと解らなかつたようです。お金持ちと庶民の違いでしょうか。

「あ、じゃあそのこと高科先生に言つてきます」

ぼくはそう言い残して保健室に向かいました。

* * *

「ええーそうなの？じゃあ、もうここは用無しなのね。残念だわ」
保健室の冷蔵庫からアイスコーヒのボトルを受け取りながらぼくが説明すると、養護教諭の高科先生は本当に残念そうに言いました。とつても優しい先生です。

「いままでありがとうございました」

「たまにはお話しにきてね」

「はい。もちろんです」

どこか名残惜しそうな先生を残してぼくは部屋に戻ろうと振り返りました。

そのとき、保健室の扉が開いて。

「あ、ごめんなさいね。櫻井さん」

先生から呼び出されたのだと知りました。

「いえ」

保健委員の櫻井あやなさまです。よく高科先生に頼まれごとをし

ているのを目にします。でもいつも嫌な顔をせずに引き受けているんです。

「ちよつと今月の保健だよりで手伝ってほしいところがあるの」

「はい。パソコンですね」

櫻井さまはテーブルにあったパソコンの前に座りました。高科先生はパソコンに弱くてそういう資料を作るとき、よく櫻井さまに相談されています。

「今月はどういうテーマなんですか？」

アイスポックスを床に置いて、ほくもテーブルに近づきました。

前回は熱中症のお話でした。

「こころの病気について書くことと思うの」

「こころ……」

櫻井さまが咳かれました。

「そう、やっぱり多いからね。予備軍も含めると」

「そうですね」

確かにそうです。ぼくにはまだわかりませんが、思い悩まれている方は多いでしょう。

「ちよつとこれから職員会議があるの。申し訳ないけれど、この下書きを清書していてくれるかしら」

「はい」

ぴらりと一枚の用紙を置かれて先生は出て行かれました。

「櫻井さまは大丈夫ですか？」

先ほどの咳きが気になってしまっただけは聞いてしまいました。

櫻井さまが神崎さまを好きなことは知っています。

人が嗜好きなどところはどこへ行っても変わらないのでしょうか。パティでダンスと一緒にされたことで、知れ渡ってしまったようです。

「大丈夫です。高田さまは……大丈夫そうですね」

「ええ。悩むことは餌やりだと思おうようにしています」

「えさ、ですか？」

少し面食らった顔をされてしまいました。

「そうです。スキューバダイビングとか…水族館のスタッフでもいいです。とにかく水に潜ることが悩みだとして、でも一生懸命餌を持って頑張つて潜つていくと、とても綺麗な魚たちがたくさん集まって来ているんです。ずっと必死に潜るんですけど、ふとその光景に気づいてとても感動するわけなんですよ。……えつとですから、つまり、一生懸命悩みから逃げずに戦つていれば、感動することや嬉しいことがその先には待ってるぞ、と。そう思うようにしてるんです」

一生懸命喋っていたら、なにを言いたいのか分からなくなってしまいました。

ぼくがこういう話をするとは皆はバツサリ切り捨てるか、聞いてくれていても途中でうんざりされたり、笑われたりするのです。ちょっと例えが上手くないのかもしれないかもしれません。

「素敵ですね」

だけど櫻井さまは笑わずに聞いていてくれました。いえ、微笑まれていますけど、馬鹿にした笑いではなくて…。

ほら。

周りの反応を気にして、どこかで会話することをやめてしまっていたら、いまの感動はなかったんです。

櫻井さまは真剣な表情でパソコンを打っていました。

ついぼくも真剣にその姿を見ていて…。

櫻井さまの半そでシャツから伸びている腕は、とても白くて細いです。

玲華さまもそうなんですけど、玲華さまは運動神経が良くてもうちょっと筋肉があるんですけど。ってこんなことを言うと櫻井さまができないみたいで……。えつとそうではなくてつまり。

櫻井さまはもうちょっと華奢で、触れたら折れてしまいそうな…、そんな危うさが……。

「櫻井さまは、まだ、かん……」

あああああああ！やってしまいました！

（まだ神崎さまを好きかどうかなんて、聞くつもりなかったのに！）
しかも不自然に止まってしまってます。

なんとか誤魔化さない！

そう思っただけで焦っていると、先に櫻井さまが口を開かれました。

「もう、大丈夫ですよ」

「……………」

（櫻井さまは…………）

もう吹っ切られたのでしょうか。すごくそのときの笑顔が大人っぽくて、どこか…。

そのとき視界にアイスポックスが入りました。

「あつ。ぼくもう行かないと」

かなり焦って立ち上がると、パイプ椅子が傾いてしまって、また焦りながら両手で掴みました。

ぼくはなにをしてるんでしょう…。

「また、素敵なお話聞かせてくださいね」

みっともないぼくの姿を見ても気にしてないようで、さらにそんなことを言うてくださるもんですから、ぼくは本当に…………。

（どうしよう、嬉しいとか、思ってしまう）

「はい。絶対にしましょう！」

かなり必死にそう答えてぼくは保健室を出ました。

やばいです。顔がにやけます。

止めようとしているのに緩みっぱなしです。

「なーるーほーどーねー」

そのとき。

悪魔の囁きを聞いた気がつ。じゃなくて！なにをいつてるんだ、ぼくは！

だけどっ。玲華さまと神崎さまが保健室を出て角を曲がったあたりで、そこに立っていられたら、だれだっ！

「立ち聞きしてたんですかっ！？」

ぼくが詰め寄っても、さらりと玲華さまはかわされました。

「だってどこか楽しそうに保健室に行くからさー」

「俺はやめようって言ったんだけど…」

「ちよっと一人で逃げないでよ」

「二人とも同罪ですよ！ひどいじゃないですか！」

あああつ。このアイスボックスで頭を殴りたいとか、そんなこと思ってしまった。

「だから俺が協力するって言ったときだけ怒ったわけか」

神崎さまは珍しく鋭く、そう切り込んできました。

うつうつ。ちゃんと気づいていたんですね、ぼくが怒ってしまったこと。

「なかなか良い雰囲気だったじゃない、ほのぼのとしてて」

「遊ばないでください！玲華さま」

すごく失態です。まさかこんな形でバレてしまうなんて。

「いいじゃないの。別に壊そうとか思ってたないしさ」

「当たり前です！」

「俺も応援するから」

「神崎さまは罪悪感をちよっとでも減らしたいだけなんですよねー」

「ヒデてめえ、言うてはいけないことを！」

ふんだ。いいんです。たまには。

ぼくがちよっとだけ怒っても、どうせ二人は気にしないんだから。でも。

怒るなかにも嬉しさが混在している。

ぼくも頑張ってみようかな、なんて、らしくないことを想ったり想わなかったり…。

三人で部室に戻る間、ぼくたちはもう普段どおりの状態になっていました。

つまり、ぼくが突っ込まれる側に…。はあ。

【久保田修次】（前編）

うだるような暑い日が続いてる。今年は記録的な猛暑らしい。その一文を毎年聞いてるような気もするが…。

そんな暑いときに学生には夏休みがあつて、暇な時間を持て余す時期だ。

街には普段ならば、平日の昼間にはあまり見かけないガキども

おつと失礼　　少年少女たちが溢れかえってる。

暑いんだから家にいればいいのに。

果てしなくそう思うオレは、子供が苦手だったりする。

あいつら自分の欲望に素直だし、無駄に体力余ってるしそのくせ周りが見えてない。……のがほとんどだ。

まあ、大人のフリをした子供ガキもわんさかいるし。妙に大人びたガキもいるし…一概には言えないが。

ただ単に、オレがどう対応していいかわからないんだと思う。

「えー信じられないー。久保田さんってここで寝泊まりしてたのー？」

「だけどオレは世間からはとくに大人のカテゴリーに属されていで、ガキのフリをするつもりはない。

だから、いくら暑い真夏の午後にも、目の前でいくらガキに侮蔑の色で見られようが、オレは相手にしたりしないのだ。

「放つとけ」

「反応といえはこれくらいが関の山。」

「げっ。じゃあ風呂とかどうしてんだよ」

「主にジムだな、あとはスーパー銭湯」

「まじかよ」

「ジジくさいわね」

「……………」

夏休みだから暇だと言つてこの事務所に入り浸り、失礼なことを

言いまくっているのが、言わずと知れた神崎悠汰と西龍院玲華である。

いくら追い出してもこいつらはやってくる。

「ねーそれより暇なんだけどー。依頼人来ないわねー」

そしてなぜか毎回玲華嬢はこんなことを言う。

「そんなにバカバカ来るか。………って…来たらどうする気なんだよ、だから…」

「はあー。せつかくここに来れば面白いことが待ち受けてると思っただのになー」

玲華嬢がこちらを一切無視して、ソファにもたれながら伸びをした。

そう面白いことなんか起きるはずがないだろう。起きてるならオレだって苦勞はしてない。

「良いから二人でどっか遊びにでも行けよ。若いんだから」

追い出したくて、冒頭で嫌だと思っていたことを進めてみる。

ああそうか。他のガキたちも、もしかしたら親などに追い出されたのかもしれない。

「悠汰がさーお金かかる遊びはイヤみたいなんだよねー」

「うるせえ、人のせいにすんな！」

悠汰が長いソファからガバツと起きた。

まったく…。だから人の家（いや、事務所だけ）に入り浸るのか。

「おまえ、ヒモには向かないな」

ささやかな仕返しとばかりに、オレは悠汰をからかった。するとやつは想像通りの反発をする。

「そんななるか！向かなくて良いんだよ！」

本当、こいつだけは期待通りの返しをしてくれるよな。

オレは満足して事務机でコーヒーを飲んだ。

この春にきた依頼は、内容も対象者もオレには嫌悪的なものだった。

まさか終了した今でも、友好的な（一般的に見れば友好的な）関係でいられるとは、正直想像してなかった。

とくに悠汰からは断絶をされるか、良くても淡泊で希薄な関係で終わるものだと……。

最初の頃の拒絶ぶりを考えれば、悠汰が成長しているためだと思える。

（ノビシロが多いのも考えもんだ）

とにかく今は疎ましいことこの上ない。

「意外とここ流行ってないのね……」

「あのかなあ……」

「だから嫌だと思った依頼でも引き受けたのね」

「……………」

まったくもう。玲華嬢は玲華嬢で遠慮というものがないし。特にオレ相手には。

ガキみたいに怖いもの知らずな一面が見えたかと思えば、妙に悟りを開いたようなこと言う。なまじ鋭いし……。扱いづらいことこの上ない。

特に今は頼みの綱の祥子君がいない。

さきほど仕事に必要な用品の買出しを頼んだのだ。その隙間に二人はやつてきた。

「そうなんだ」

どこか落ち込んだように悠汰が呟いた。

……………つておいつ。勝手に納得すんな。肯定してねえぞ。

確かに経営は楽ではないし、今回の仕事で助かった面も否定はできない。

しかしそんなことはコイツには関係ないことだ。

「そんなんじゃないやねえよ。好きなことだけしてりゃ済むほど世の中甘くもないからな」

「ふーん……」

悠汰は最近、よく考え込むような仕草をする。

「ごちゃごちゃ考えてるな、っていうものなら以前から在^あった。だけれどいま目の前で見せられてるものはもつと深い。どこか大人がするよつな仕草。特に仕事の話をするところなるよつな。

成長中ってところか。良い意味でも悪い意味でも。

「なにか不安か？」

不安なのか？ 将来のことが。

それは家庭のこれからのことか？自分の未来か？それとももつと別の……。

「えっ？…いや、違う。昨日兄貴に会いに行っただけど元気そうだったし不安なことはない」

一度顔を上げて、それから悠汰は首を横に振る。

「父親には……。意気込んで会うつもりで行ったけど、なぜか会ってくれなくて……。でもそれは父親が逃げてるんであって、俺が気に病んでも仕方がない。池田さんも…兄貴のことは未成年だし未遂だし、事務的な処理で終わるだろうって言ってたから……。今は嘘みたいに気にすることがないんだ」

嘘をついている素振りも、強がっているふうでもない。

恐らく“父親が逃げてる”っていうキーワードを与えたのは玲華嬢だろうな、と思う。悠汰では考えが及ばなかった部分だろう。

(なるほど、な)

では漠然とした不安なのか。

悠汰自身形になってないもの。それがオレには見えた気がした。

「なあ、探偵つてやってて楽しい？」

ソファの手すりにもたれかかって、デスクにいるオレに向かって悠汰が訊いてきた。

真っ直ぐな瞳。

この類の質問を最近される。だけど毎回、即座には答えられなかいでいた。

それはもしかしたら悠汰にとって、すごく大事で重要な質問だと思えたからだ。オレの回答次第で、あらぬ影響を与えてしまう懸念

があった。

（オレはいつから、こんなにコイツを気にしてるんだ）

一体いつから、保護者のような目線で……。

少し愕然とする。

ガキは嫌いだって言ってるのに。悠汰の突き刺さるような視線を、受け止め切れなくて逸らす。

「楽しいわけないだろ。大変だ、大変」

「真面目に答えろよっ」

「なんだあ？おまえやりたいのかあ？」

冗談で、本当に軽口を叩いただけなのに、悠汰の瞳は変わってなかった。真面目なままだ。

（まじかよ…）

そのとき出入り口の扉からガチャガチャ音がした。

顔を向けると祥子君が買出しを終えて帰ってきたところだった。

片手に小さい袋を一つとバックを下げている。

「先生。帰ってきました。あら、いらっしやい神崎くん、玲華さん」

オレはほっと息を吐いた。これで二人のことは祥子君に任せられる。

「お帰り。早速で悪いけど、オレは出かけるから」

「…はい」

一瞬だけ戸惑うも、すぐに祥子君は頷いた。

「どこ行くのよ」

鋭く玲華嬢が切り込んでくる。

「仕事するのはな、表に見える部分だけじゃないんだぜ」

適当に、自分でも意味が解らないことを答えてオレは事務所を後にした。

* * *

自分でも意味が解らないということは、玲華嬢に見抜かれること

もないわけだ。

要はどうしても言うわけにはいかなかったのだ。
今日は人と逢う約束があった。

「お怪我の具合はいかがですか？」

ツンとする薬品のおいがこの部屋からはしない。

あの時壮絶な事件現場になった病院の中の一室。

そこでオレはその人と対面していた。この内科医長で悠汰の父

親、神崎一成かすなり氏。

この人の居場所のひとつである内科医長室はそんなに広くはないが、しつかりと外界から閉ざされた、密談するには相応しい個室だ。正式な依頼人は本当はこの人で、母親はあくまで代理だった。

しかし連絡を通すのは決まって母親にだったのだが、それも依頼人の希望であった。忙しくて構ってられなかったんだらう。

だけど今はその代理人はオレとは会う余裕が無い。身体的に。

「見て解る通りだ」

短く神崎氏が答える。

神崎氏は杖をつきながらも窓際に立っていた。まずまず、というところか。

最後の報酬を受け取るために、今日はわざわざ呼ばれた。

本来は口座受け取りの契約だったのだが、足が悪いために銀行に行けないらしい。

「悠汰君が気に病んでましたよ」

別に言う予定にはしてなかったが、オレは告げてしまった。先ほ

どの悠汰の仕草を見たせいでと、自己分析する。

神崎氏はやや苦渋の色を見せた。

「君は余計なことをしてくれたな」

「余計なこと…ですか？」

「私は見張れと言ったが仲良くなれ、とは言っていない。不要な干渉だとは思わなかったのかね？依頼外だよ」

「人と人の関わりなんて分からないものです。…もちろんその代金

なんて不要ですが」

「当たり前だ。私は悠汰に余計な人物を接触させないために見張らせたんだ」

（ああ、そうかよ）

つまりはオレもその余計な人物に入ると言いたいようだ。

息子たちが聞いたらまたひと騒動起こりそうな態度。恐らく根っからこんな性格なのだろう。

これでは子供のほうが苦勞させられるのも頷ける。

「それで…なぜ惣一君とも面会されないのですか？」

「……………あいつは…私を殺そうとした。会えるはずがないだろう」

おまえに関係ないことだと、一蹴されることを予想していた。

しかし動かないままで神崎氏は呟く。

この人も参っているのだろう。長年見てきたものが嘘だったと、わかってしまったのだから。

苦しそうな顔が、よく似ていた。悠汰と。

「ずっと閉じ込めておきたかった、二人とも。そうすれば誰にも汚けがされずにいれたのに。余計な影響が入りすぎたんだ。だから壊れたんだ」

この人は…、いつまでそうやって周りのせいにするんだろう。

感情をあらわにして怒鳴りつけてやりたい衝動に駆られた。この大人のフリしたガキに。

いい加減にしろ、と。だからおまえは失敗したんだ！と。

同時に、悠汰がそこを受け継いでいないことに安堵感を覚えた。

伸び代があるから、もっとずっと成長する、あいつは。

この人にはそれが余り無い。すでに完成されてしまっているのだからかなりの衝撃が、影響が必要になるだろう。恐らく今回のような…。

今回のことで変わらなければこの人に未来はない。

容赦なくそう思った。

しかし寸でのところでそれを抑え、大人なりの応対をして直ぐにその部屋から出た。

オレが代わりに不満を撒き散らしたところで、何も変わらないだろう。なに言っただ部外者がと、聞く耳を持ってもらえないのが着地点だ。

* * *

唯一の用事が終わっても、すぐには事務所に帰れなかった。

感情的になってしまっている部分が残っていることを、解っていたから。引きずっていたんだ。

気持ちを整理して落ち着かせるまで、誰にも会いたくなかった。傷つける。八つ当たり、しそうだった。

(なかなか大人にはなれない)

悠汰は前に、自分のことを余裕があつて良いよな、って言った。それは違うんだ。

(オレも同じ…)

大人のフリをしたガキ。

かと言って、素直に感情を曝さらけ出せるわけでもない。悠汰のように真っ直ぐにはぶつかっていけない。

昔のままでは、いられないのも事実だった。

無意識に抑えてしまふんだ。

(強くなりたい)

いちいちぐらつかない精神力が欲しい。

オレは、とりあえずうるうる街をふらつてから事務所にもどった。

「？」

変化は、すぐに気づいた。

あれから二、三時間くらい経っていた。真夏でもすでに陽が落ちてきている。逢魔時。

まだ事務所には二人がいた。祥子君もちゃんという。

三人はソファに固まって話をしていたようだった。オレが入って

きたところで、一斉に見られた。

そして。

「あら、帰ったのね久保田さん」

誰よりも先に玲華嬢が反応する。

「お帰りなさい、先生」

「遅かったな、どこ行ってたんだよ」

当たり前障りのない、普通の会話。

だが最後の悠汰の反応がすべてを物語っていた。

わざとらしい。

一見女性の二人は普段通りだが、悠汰だけがぎくしゃく…という
か、ソワソワしていたのだ。

「帰って、こなかったほう良かったか？」

「やだ。なに言ってるの？久保田さん」

「あ！もうこんな時間じゃないか。玲華、帰らないと…」

「えーもう？でもそうね、いつまでも邪魔したら悪いわね」

二人はそんな会話をしながら、そそくさと出て行ってしまった。

「祥子君…」

ひとり残った祥子君も腕時計を見てから立ち上がる。

「わたしも今日は上がらせていただきますね。お疲れ様でした、先
生」

なんか怪しい…。

祥子君の態度は自然だが、全体的に絶対怪しい。

「祥子君！」

呼び止めるオレの声を無視して、さっと祥子君も帰ってしまった。

(なんだよ)

グレてやるうか。一瞬だけへこみそうになった。

とりあえず事務所を見渡して変化を探る。

特にはない。

祥子君のデスクをチェックするが、ここにも変化はない。

そのままオレは給湯場があるところに向かった。備品はきっちり

いつも通り片付けてある。

洗われたグラスが四つ、食器カゴに置かれていた。シンクにも水滴。

つまり。

(！)

オレは後を追うように事務所から飛び出した。

* * *

その夜。深夜。

ぶらぶら家までの帰途につく間、会ってはならない人に会った。会ったというか……まず相手は車だった。真っ黒いベンツの車。なんかついてくるな、とは思っていたんだ。会ってはならない人だから当然会いたはずがなくて、オレは車では入れない細い路地に避けた。

そこで時間をつぶそうと煙草を取り出す。

仕事中は吸わない、という流儀がオレにはあった。

今回の件は時間だけ無駄に長くて、途中で吸っちゃったけど……というより、本当は行き詰ったせいで欲求を抑えられなかったただけだな。

煙を肺に入れて、ため息混じりに吐き出す。

「隠れるように吸うとは。未成年だったのか？久保田君」

この声は。

オレはもう一度長く息を吐いた。

「こんなところまで来るんなら、車でつけないでくださいよ」

出来れば今は会いたくない人物が、実に愉しそうに和服姿でそこに立っていた。

お供もつけないで、ただ一人。

「気づいとるくせに逃げるから悪い」

「もう会う必要ないでしょう？功男さん」

浅霧功男。

そう適当に相手できる人ではないが、こう足取りが軽くしゃしゃり出られるとどう対応していいか……困る。

初めて会った瞬間、オレのガキの部分を見抜いて叱り飛ばしたくせに、その後何故か懐かれたみたいなのだ。

この軽さのせいで近寄りがたい雰囲気がないのは助かったが……如何せん……苦手だ。

「いやな。偶然見知った顔を見つけてな。暇なのだよ。いいから相手にしてくれ」

「嘘言わないでください。貴方、悠汰に引退したに等しいとかおっしゃってましたが、まだかなり影響力のある人なんですよ？」

「だから等しいと濁しておる。盗み聞きは感心せんぞ」
「してませんよ。本人から聞いたんです」

嘘だった。盗み聞きはしていたんだ。あのとき。

あまりに愉快そうに愉快的格好して出向くから、ものすごく気になった。

「まあよい。それよりあの少年はどうしておる？」

「悠汰は元気ですよ。貴方こそどうなんですか？お孫さんのほうは「なかなか不器用な子でな。ワシが声をかけても恐縮した姿勢を崩そうとせん。畏まることはないと云つても聞かんのだ」

「ぬはははは。避けられてるんじゃないですか」

「おまえさんは、もう少し恭順の意を示したまえ」

ついバカ笑いをしたオレに、功男氏はこれでもかというほどの冷やかな視線を投げてきた。厳しい空気が纏う。

しまった。調子に乗りすぎたか。

反省したのをまるで見計らったように、功男氏は厳しさを解いた。こういうところはさすがだと思う。有象無象を相手に束ねている人だ。他人の腹のうちの察知する術を身につけている。

「なにか不安なことでもあるのかね？」

だからオレが悠汰のことを見抜くように、この人にはオレぐらい

なら容易く見破る。

まさか同じような指摘をうけるとは思わなかったが…。

この人に隠し事をして無駄だ。オレは転がっていた空き缶を拾って煙草の火を消した。

「悠汰が、探偵の仕事に興味を持っているようです」

「ふおっほっほ。それは喜ばしい」

「どこがですか？」

「弟子として鍛えてやればよい」

「冗談じゃない。やめてくださいよ」

「なぜ厭う。彼がそうだったのはおまえさんに刺激を受けたからではないのか」

裏の部分も知らずに憧れても、後で後悔するのは悠汰自身なのだ。もちろん最初は皆そこからの出発で、オレだって軽い気持ちで始めたものだけれど。

「だけど複雑に思うのは。恨まれることがあるんだ。それは不当な恨み。」

自分の行動や性格上から発せられた恨みならば、仕方がないと思えるが、逆恨みだけはどうにもならない。

(他人の悪意に神経質になるくせに)

その度に真っ直ぐ突っ走っていたら、いずれまた参ってしまうだろう。

「なんとか思い止とどまらせることが出来れば、とは思うのですが」

「それは彼の両親と同質の思潮だな」

「！」

そうか、そうなるのか。

悠汰の起動を操るということは、医者になれと言った一成氏と同じことなのだ。

まったく…。言われるまで気づかないとは。

この人に全てを話さなければ良かった。

とはいえ、今更後悔したところで、犯人を追っている理由を告げ

るためには避けられなかったのも事実ではある。

「老人は敬えよ」

「はい？」

いきなり変わった内容に、すぐにはついていけなかった。

「いつまで立ち話をさせておるんだ？いいから、おまえさんの行き付けの店へ連れて行け」

「なんでオレの行き付けの店……」

嫌ですよ、とはすでに言えない雰囲気だった。

「視野を広げることは重要だとは思わないかね？」

オレに背を向けて功男氏は歩き出した。

絶対オレが着いて来ると信じて疑ってない。

反対側に走ろうかな、と一瞬頭を霞めたが、実行できるはずもなく……。

(つまり、料亭は飽きたんじゃボケって言いたいんだらうか……)

その歳で、いま下に広げてどうするんだらう。

オレが隣まで着いていくと功男氏はかすかに笑った。

「西龍院のこのじじいと最近話した」

歩きながら語る。

長年ライバルであり共に財界を駆け抜けた二人だ。あちらの方が権力的には上だろうが、付き合いの長さからか親しみを感じているのだとわかった。

「そう、ですか」

「やはり孫が一番可愛いとな。向こうも大した祖父馬鹿ぶりだったぞい」

西龍院家にはたくさんの子供がいる。となると孫もその倍近くいるはずで……。

「玲華嬢のことですか？」

だけどオレにそう言うつてことは、そうなのだらう。

「彼女は実に爽快な女性だ。見ているものを圧巻する」

「貴方でも、ですか？」

そうならばオレに敵うはずはないわけか。

「さあな。それはそうとして、少年は今後また苦勞しそつだな」

「今でも充分尻に敷かれてますけどね」

「そうではなく……」

功男氏が答えかけたとき、停車していたベンツに近づいたから、その意味は先延ばしにされた。

そして。本当にオレの行き付けの店なんか連れて行って良いのか、真剣に悩んでいる中、オレはベンツに乗せられた。

【久保田修次】（後編）

それから二日後。

また二人は事務所までやってきた。本当に暇人だな。

自分はどうかやって学生のと看夏休みを過ごしていただろうか…。

こいつらといると振り返ってしまう。思い出しても仕方のないことなのに。

「今日は話があるんだけどさ」

何の前触れもなく玲華嬢がソファに座りながらこちらを見た。

対面するように座る悠汰を見ると、僅かにその顔が興奮に満ちていた。祥子君が烏龍茶を四つ、そのテーブルに置く。

オレの分もそこに置くてことは、そちらに行つてほしいらしい。ひとつため息をついて、オレもデスクから悠汰の隣のソファに移動した。

あのと看の違和感の説明をしてくれるんだらな、と予想していた。「なんだ」

「ちよつと待つてね」

玲華嬢が高価たかそうなバックからA4サイズの封筒を取り出した。その中から出たものは。

数枚の書類と写真。特に写真が多くて二、三十枚ぐらいあった。書類には“村野巨浮気調査”と記入されている。

そして切り出したのは悠汰だった。

「この前、久保田さんが出かけたときに、依頼人の女性がきたんだ。なんか急いでるみたいで、今すぐ探偵と会いたいわって」

「なんか最初は話を聞くだけって言ったんだけど、あまりにその人が焦つてて、それであたしたちが代わりに引き受けたってわけよ」

玲華嬢がそれに続く。

「それで？ずつと暇だったおまえらは面白半分に調査してきたって言うのか？オレに隠して」

オレは二人を睨んだ。思ったより低い声が出た。

「否定はできないけどさ、でも割とすぐ証拠が集まったのよ。見てこの写真」

玲華嬢が写真を差し出してきた。オレはそれを受け取り確認する。三十代後半ぐらいの男性と、若い女性のツーショット。肩を並べてラブホテルに入る時から出るまで、事細かに何ショットにも撮られている。道端でキスしているものもあった。対象者が合っていれば、証拠として申し分ない画像だ。

「ね。すごいでしょ。すぐに出来ちゃった」

「すぐじゃないだろ。何時間も待ったじゃねえか」

嬉しそうに言う玲華嬢に悠汰は力ないぼやきをした。

「いいじゃない、あれくらいは。楽しかったわよ、あたしは」

玲華嬢の言葉をきっかけに、オレは写真をテーブルに投げ置いた。バサツと散らばる。

「楽しいだど？こんな勝手なこと冗談じゃねえ！」

オレの真剣な怒りに周りが凍りついた。構わずオレは立ち上がる。

「おまえらまだ高校生だろうが！こういう界限で張り付くのも問題だし、まずオレに何の断りもないのが許せない！」

すぐに玲華嬢が立ち上がった。悠汰は驚愕に顔を滲ませて、じつとオレが怒るところを見ていた。

「しょうがないでしょ！あの人、すぐに探偵に会えないんだったら別のところに行くって、本当に急いでたのよ！」

「だからなんだよ！仕事が少ないから気の毒にでも思っつて、勝手に引き受けたっていうのか！」

「逃がすよりはいいと思っつたのよ！そりゃあ、黙っつたのは悪かつたけど、言っつたら絶対させてくれなかつたでしょう！？」

「あたりまえだ！」

オレは一喝して祥子君を見た。

「祥子君も祥子君だ！なぜ君まで許した！」

「あ…、ごめんなさい先生」

「ちょっと！祥子さんを怒らなくたっていいじゃない！話し聞いたらあたしたちでも出来そうだったのよ！実際完璧にこなしたんだし、何も問題ないじゃない！」

「たくこいつは！なんにもわかってない！」

「だったら、おまえらその依頼者に何で急いでるのか聞いたのか？」

三人を順に見つめる。祥子君がどこか苦渋の表情をしていた。

悠汰は強張った状態で、さきほどから何も口を開いてない。そこは気になった。

玲華嬢は変わらずオレを睨み返してる。

「もちろん聞いたわよ。依頼人の村野清美さんは、もし浮気が立証されればすぐにでも離婚したいって。お子さんが来年春に小学校に上がるから、環境が変わるなら同時の方が子供の為にも良いからって言うてたわ」

玲華嬢は依頼契約書を差し出した。

「ここにまとめてあるわ」

「だったら、その理由が真実だということを調べたか？」

「……………嘘をついてると言いたいのか？」

「その可能性もあるということだ。どんなにささやかな依頼に見えても、犯罪の片棒を担がされていたと後から分かってからでは遅いんだよ！」

「それなら大丈夫よ！この人は嘘ついてないわ」

「なぜわかる？」

「勘よ！」

悪い？とでも続きそうなくらい玲華嬢は堂々としていた。

こいつはもう！

「勘でやる仕事じゃねえんだよ！すべて事実に基づいてやるんだ！失敗は許されねえ」

ようやく玲華嬢が黙った。

悠汰はまだ、何も言わない。

オレは二人を見て唸るように訊いた。

「どちらから言い出した？」

祥子君からでないことは解っていた。

「あたしよ。暇潰しになると思ったの」

やや抑え目に玲華嬢がそう言くと、ようやく悠汰が立ち上がった。

「違う！俺がやってみたって言ったんだ！」

こいつは…。

(自分がいま、どんな顔をしてんのか分かっているのか？)

悠汰は真っ直ぐオレを直視しているくせに、眉間にシワを寄せて…
…いまにも泣き出しそうだった。

「つまり、両方が」

オレは腰に手を当てため息を吐く。

悠汰にもし、そういう気持ちが一欠けらもなければこんな庇い方はしないだろう。とはいえ、玲華嬢がいなければここまで思い切ったことが出来なかったのも事実だ。

「探偵業法のことなんて知らないんだろ？な、おまえらは」

「知ってるわ」

玲華嬢が神妙な面持ちで即答する。悠汰が驚いた顔でそんな彼女を見つめた。

「知っていたわ、ごめんなさい」

探偵業法第九条二、探偵業者は、探偵業務を探偵業者以外の者に委託してはならない。

そういう内容が在ったってことも、知っていたということか。

「くそ！踏みにじられた気分だ！」

オレは玲華嬢から契約書を奪い取り、少し散らばった写真を集めて封筒ごと資料を取った。

「依頼人にとっては関係ない話だろうな。最後の仕上げはオレがやる」

「でも先生！レポートはっ…」

「オレがやる！君にはがっかりだ！」

オレは祥子君の顔も見ずに遮る。こうい書類のまとめはいつも

は祥子君の役割だった。

「ちよつと言い過ぎじゃない！」

とがめる口調の玲華嬢にオレは最後の一言を放った。

「おまえらは帰れ！ここは遊び場じゃないんだ。二度と来るな！」

更に重苦しい空気になったのにも構わず、オレは応接室から見て左にある扉に向かった。

そこにはオレが寝泊りしている寝室兼書斎にしている部屋がある。音を立てて扉を閉めた。

(つくそ！)

最後に見た悠汰が浮かんで消えない。傷ついた、顔をしていた。

分かりやすい奴はこういふとき卑怯だと思う。普段の何倍にも罪悪感を感じる。

祥子君はここにだけは入らないから、物が乱雑していて汚い部屋でもオレにはどこに何があるかちゃんと解っている。

困うように棚があり、本がぎっしり詰まっている。それはジャンルを問わない。仕事のものから趣味のものまであった。

床はほとんど機械で埋まっている。足の踏み場がなんとか作っているけれど。

そんな部屋の中の、やはり書類が乱雑して置かれている机の上に資料を投げるように置いた。そのまえに座り、丁寧に内容を確認していく。

依頼人への報告期限は三日後になっていた。つまり明日。

いくら子供のことがあろうと、この期間の提示はあり得ない。

この女性が“恐らくこのホテルに来るだろう”とヒントを与えていたのが読み取れた。かなり正確に夫の行動範囲を把握していたようだ。確かに、そうでなければあり得ない素早さで現場を押さえられたということになる。

それなのに、こんな探偵……第三者を絡めてより確固たる証拠を掴ませたのは、家庭裁判所に突きつける為だろう。

それほど焦るといふことは……。

(男、か)

この依頼人には恐らく男がいる。長年の経験からそう推察した。その男と少しでも早く一緒になりたいのだ。女性が再婚するには再婚禁止期間がある。子供を利用して嘘をつくとは、なんて母親だ。(まあ、それぐらいならまだマシな理由か。あとで確認するとして……)

悠汰は信じて、同情でもしたのだろうか…。

崩壊しかけている家族。女性側がどういう気持ちだろうと、男の浮気は事実だった。

「ちよつとねえ！」

ドンドンドン！と扉を叩く音と例華嬢の声がした。

「勝手なことしたのは悪かったと思ってるわ！だからって閉じこもらなくてもいいでしょう！」

無視して書類に目を通す。

確かに、尾行をしたのがあいつらだということ以外、なにも問題ない内容だった。恐らく祥子君が助言をしたんだろう。いつの間にか彼女も成長していたということか。

「玲華さん、もうやめましよう。いまは何を言っても、先生には…」
祥子君の声も聞こえだした。扉の前で会話をしているようだ。
「嫌です。ここで引いたら本当に来れなくなりますから」

だから何で祥子君相手だと敬語になるんだ、あいつは。
そう言えば悠汰も気づけば敬語のときがある。それはオレに対してもだった。そしてもう呼び捨てにはしなくなっていた。

稀にだが、変わりつつある。気にしてるんだろうか。オレがあのとき言った言葉…。

「久保田さん」

悠汰の声が、した。彼のこんな声はよく聞いた。弱くて細い。

怒鳴るそれとのギャップがかなりある。

「怒るの、当然だよな。俺だってム力つくと思う…。悪い、気づけなくて。…いつも」

「悠汰だけのせいじゃないわ、今回のことは」

庇う、玲華嬢の言葉。

「でも俺だけ何にも知らなくて」

「あたしはただ単に暇だからネットで見ただけよ」

探偵業法の話か。というより、扉の前で会話をするなよ。丸聞こえだ。

「でも、やっぱり……」

一旦、悠汰の声がかき消える。それから、またドンと扉が叩かれる音がした。

「久保田さん！殴っていいよ！」

「悠汰？なに言ってるの！」

「ちよつと黙ってて。……なあ！あんとき俺、おまえを殴ってチャラにしただろ」

そうだった。

車の中であいつにそう言われたときから、本当は殴られる覚悟をしていた。

やれるならやってみろ、とあいつには言ったけれど。本当は殴られても良いと思っただ。悠汰になら、仕方ないと。

だけど悠汰はすぐには殴らなくて、あのあと二週間ぐらい経ってから思い出したように殴ってきたんだ。

身構えて殴ると避けるだろ、おまえ。そう悠汰は笑って言いやがった。

でも多分、本当に思い出したところで殴ったんだろうな、と思う。

(殴る前に、あっ、て言っただからな)

そういう計算ができないことは知ってる。

だけど……。

「だからさ！今回もそれでチャラにしようぜ！じゃなくて、して欲しいんだ！玲華も祥子さんもダメだけど、俺なら殴られるから！だから！二度と来るななんて、言うなよ！」

叫ぶ度に叩かれる扉。

必死なんだ。もう二度と捨てられたくないという焦燥感。

それぐらいには、抛り所にしてきているのだろうか。近くに居過ぎたのかもしれない。それぐらいの責任がオレにはあるんだろうな。大人側として。

（全く、解ってない。こいつは　　）

だから、オレは資料から手を離し立ち上がった。扉を勢いよく開く。

まだ怒っているオレの表情を見て、眉尻を下げてそいつは前に立っていた。生まれ持ったの弟気質。そんな顔だ。

なにも言わずにオレは左手で悠汰の肩を押さえ、右腕を振りかざす。

一瞬怯えて悠汰は固く目を閉じた。

（なんとかしてやりたいと、思ったんだ）

見張るなかで、悠汰のこういふ顔を見る度に、徐々に入り込んでいったんだ。こいつに。

それだけが理由。

気になりだした、理由。

オレは持ち上げた右手をポンと悠汰の頭に置いた。

きつと、惣一も他の周りの大人たちもこんな顔を向けられたら突き放せない。彼の両親みたいな心情の人間も確かにいるのだけれど。

「もう、そういうこと言うのはよせ」

悠汰が目を見開いた。

「どんな理由にせよ、殴ることは暴力だ。そういうことを解決するために使うな。自分から提示することも、本来残酷なんだ」

わかるか。

わかっているのか、悠汰。それはおまえ自身が嫌っているはずのものだろう。

ならば早く、他の方法を見つけてくれ。

「……………」

「もう今回のことは良いから。二度とするなよ」

オレがそう言うと、悠汰はほっと息をついて頷いた。
玲華嬢にも目だけで訴える。すると、満面の笑みを向けられた。
こ、こいつは……。

* * *

空気が元に戻り、安心して二人は帰って行った。

「やってみてわかったよ。尾行の大変さは兄貴のことで知っていたけど、張り込みも同じように辛いんだな。やっぱり久保田さんってすごいな。何ヶ月もあんなことして」

最後に、悠汰はそう言っていた。

凄いななんて思っていたことに驚く。しかもやっぱり、ときたか。いつからそう思ってくれていたのか……、オレとしたことが見落としていた。

当然オレは嬉しいなんて顔を見せるはずはなく、違うことを聞いてみる。

「もう満足したか？」

「とりあえずは、な。でも正直どんな仕事をしたいかまだよくわかんねえよ」

ここではつきり言われた。

やはり将来どんな職につくかを考え出していたんだ。

早いな、と思う。成長が早すぎだ。

(オレ、確か大学行ってもまだ考えてなかったけど……)

つい自分と比べて微かにシヨックを受けてしまった。

祥子君が温かい緑茶を煎れてくれて、オレの隣のソファにすわった。もう気づけば夕方だ。

「先生。依頼人ですが明日の五時にお見えになる予定です」

「そうか」

話が仕事の内容に戻されていった。

書類では読み取れなかった部分を確認していく。

「それで、どうだった？初めてオレ以外の奴とやってみて」

改めて訊くと彼女はふふ、と笑った。変わらない笑顔に安心する。

「でも先生、気づいてらしたでしょ」

「……………」

思わず持っている湯のみを落としそうになった。

「なんで…」

「本気の怒り方では無かったですから。しかもどこか説明するように怒鳴られて」

千里眼でも持っているのか？

オレの絶句に祥子君はまた笑った。

実は、そうだった。オレはあの日ホットコーヒー以外は飲んでいない。ひとつ多めに洗われたグラスを見て、訪問者がいたことを悟った。

そしてあいつらの反応だ。

「試してみた。あいつらがどうなのか。ここまで出来たのは祥子君がいろいろ助力したからだろう？なぜ君まで協力しようと思ったんだ」

「あら、だって。先生最近、神崎くんばかり気にしているから」
は？

祥子君の言い方が腑に落ちない。

彼女を見るとニコニコ笑いながら…。

(なんか怒ってる…?)

玲華嬢のようにぶつけない怒り方だ。オレにはこちらの方がこたえる。

「先生が尾行をしてるわたしたちの、更に後ろにいたことは知ってました。でも何も言ってくなくて…。だから試そうとしてるんだな
って、わたしは合わせた方が良いんだろうなって思ったんです」

「あのかなあ」

「それなのに、先にそのことを教えて下さらなかったのは、先生の方ですよ」

そういえば。

前回祥子君にも言わずに雲隠れしたことを、叱られたばかりだった。そういえば……。

あの時も彼女は笑いながら怒っていたことを思い出す。

「祥子君、それはだな」

「わかってます。敵を騙すにはまず味方からって仰りたいんですね」

「……………」

笑顔に崩れは無いがどこか刺々しい。

確かに、気づいた後も祥子君に何も確認しなかったのはオレも同じだ。タイミングはあった。

「玲華さんの勢いに押されたのも、確かなんですけどね。それはすみませんでした」

素直に祥子君は謝った。ここで折れられると、またしても言うべき言葉が見つからない。

ふと、先ほど見た玲華嬢の笑みを思い出した。

「もしかしたら、彼女も気づいていたのかな？」

「玲華さん、鋭いですから」

オレの言いたいことを理解して祥子君は頷く。

「わたしたちの前では、とくにそのような振る舞いはされてませんが。でも引っ張っていくのは常に彼女でした。もしかしたら、玲華さんも玲華さんなりに、神崎くんの想いを助けなくなったのかもかもしれませんね」

「まったく…ガキなんだか大人なんだか…」

わかった。一番苦手なのは、ガキではなくああいう分かりにくい存在だ。

「でも信頼、されてたでしょう？」

「……………あのな……………」

「彼女がいたからこそ、神崎くんにああ言っても大丈夫だと、ちゃんと持ちこたえることが出来ると、そう判断されたんでしょう？」

オレはため息をついた。あまり納得したくない指摘だ。

「あのあと、功男さんにまた会ってな」
徐おもむきに話を変えた。

「また見抜かれたようなことを言われたよ。それから飲みに行つて、ついこのことを話してしまつたら、また悠汰を突き放してみると諭された」

悩んだ挙句、オレの中では一応一番お洒落に見える店に連れて行かせていただいた。

それでも名目は居酒屋だ。

それなのに、やはり愉快そうに功男氏は飲んでいた。

まったく元気なじいさんだよ。まだ引退する必要ないんじゃないのか？

「あら、ではそれで？」

「考えならあつたけど、本当はちよつと迷つてたんだ。でもそれで決心した。あの人には頭が上がらないね」

悔しく思いながらもそれが本心。懐の違いを見せ付けられた。「ふふ。神崎くんは幸せですね。こんなに氣遣つてくれる人が周りにちゃんとたくさんいて」

「本人氣づいてないけどな」

祥子君の笑顔にオレも笑いながら言う。

「氣づいたところで、変なところで氣に病みそうだしな、あいつの場合」

「そうですね」

なにかを思い出したように祥子君が頷く。
意外な反応だった。

「もしかして、オレがいない間、あいつとそういうやり取りしたのか」

「そういう、とは？」

きょとんとした顔で聞き返された。

えーと……。どう言えば適切だろうか。

「つまりあいつが君に氣遣ったというような……、そういうやり取りだ」

「さあ、どうでしょう」

おい。なぜ目を逸らす。

オレがいなくなつて悠汰は二度ほどここに來ている。

後からパソコンを見たことを正直に告げてきた。フォルダのパスを解明したことも…。

天下を取つたようなニヤケ顔で、オレと祥子君の仲についてこっそり聞いてきた。ひと睨みして止めたらもう聞いてこなくなつたけれど。

祥子君にはどうしても踏み込めない距離がある。

「先生はまだわたしに負い目を感じていますか」

真剣な瞳で祥子君が訊いてきた。

負い目…。

そういうつもりで思つたことはない。ただ、二度と傷つけたくはないと、それだけだ。

だから自分の想いを伝えたら、彼女に無用な重荷を感じさせてしまつのではないか。そう思っていた。

たとえ嫌われてなくても、ここは二人でやっていく職場で、オレのほうが上司的立場だ。間違つてもパワハラやセクハラに誤解されたら堪らない。

なるべく平穩に長く、この状態が続くようにすることが最善の策で。

「祥子君、氣にすることはなにもないよ。すでにこの事務所は君がいないとまわらない。それぐらい重要なポジションに君はいるんだ」

「先生は、あまり本当の気持ちを語ってくれませんか」

少し目を伏せ、笑いながら言つた彼女の言葉に、オレは戸惑う。

本音だよ、それも。

なにを言つて欲しいんだ。

「どつという言葉が欲しい？」

解らなくて、遠いところに祥子君がいる気がして、つい直球で訊いてしまった。

「そういうこと、聞かないでください」

もう帰りますね、と変わらない笑みで言うと彼女は立ち上がった。行ってしまおう。

遠いところへ……。気持ちが遠かった。

「報告書の件だけ……」

「あら、あれは先生が作ってくださるんですよ。ありがとうございます」

なんとか話を続けようとしたけど、彼女はやはり断ち切った。

まだ、どこか怒っているような棘を感じる。でもそれがなにかオレは見抜けない。

(もしかすると)

まさか、違うだろうと思う。そんなはずないと。

(オレの気持ちって)

だって仕事仲間だろう。一度はオレのこと疎んじたんじゃないのか。

ひどい言葉をたくさん言った。初めの頃。

無能だ、とか、なんでこんなことも出来ないんだとか……。苛立ちをそのまま散らした。

あの頃は少し軌道に乗っていて、調子に乗っていたから、周りが見えていなかったんだ。

たった二人だったからこそ、彼女も吐き出す場所が無く溜め込んでいったんだろう。

今頃こんな気持ちを伝えたところで、説得力の欠片もない。

(でももしかしたら)

彼女もいつまでも新人ではない。そして今も辞めずにここにいるということ……。

だけど、あの高校生の二人のように真っ直ぐにいけないのも事実で。

「お疲れ様でした」

いつものように祥子君は身の回りを片付けて、鞆を手にして扉に向かう。

オレは迷いの中にいたまま、見送るつもりで立ち上がった。

お疲れさまと、返すつもりで口を開く。

「祥子」

だけど。

変化を、オレも求めた。

大人になって変わるのはいへんな勇気がある。

「たまには泊まっていかないか」

久しぶりの。

勇気。

入り口で彼女は振り返り、驚愕に目を瞠った。

そしてすぐに笑顔になった。怒りの含まれない純粹な笑顔。

「嫌ですよ。だってここ、お風呂ないじゃないですか」

そのまま。

もう一度挨拶をして彼女は出て行ってしまった。

しばらく茫然と立ち尽くす。

(風呂があれば良いんだな)

どこか強引にそう思い込み、オレはやっと動いた。

書斎に入る。

前はちゃんと部屋を借りていた。だけどこここで寝泊りする回数が増えて、出勤時間も勿体無くて、その部屋は引き払ってしまったのだ。

彼女のためにもう一度ちゃんとした家を持つことも悪くないと思える。

それとも隣の一室も借りて風呂を増築しようか。

いや、それだとあまりにも移動範囲が狭い。

これからの未来のことを思い巡らせながら、でも冷静さも持ち合わせつつオレは報告書を作成していった。

【神崎家】（前編）

あれから一ヶ月と少しが過ぎた。

夏休みももう終盤に差し掛かるうとしている。

俺はとりあえず、入院の必要性がなくなるまでには快気した。まだ痛みは時にあるけれど、動けないほどではなくなっていた。

そのまま、少年鑑別所に送られるという話も一時出たのだが、家庭裁判所が身柄の拘束は必要がないと判断したようだった。

確かに、逃げるつもりなど毛頭ない。

そして今、父親の車で自宅に向かっている。

父親は、一度もお見舞いという形では会いに来ることは無かったが、裏では色々と動いていてくれたようだ。

信頼のおける弁護士をつけてくれ、その人の指示を信じて手を尽くし、駆けずり回ってくれていたらしい。

精神鑑定の必要性を強調し、なるべく親権者が今後を見守っていく流れに持っていこうとしているのだと、その弁護士から聞いた。

そこまでしてくれたからこそその、釈放だということは理解している。

判決はこれからだ。

「俺はまだ許してないぞ、惣一」

車の中で、厳しい顔のまま父親が告げる。

態度を見れば解ることだった。

「これ以上、なるべく恥を晒さらしたくなかっただけだ」

「わかっているつもりです。でもありがとうございました」

初めて感謝の言葉を口にした。

どんな理由であろうと、もっと先になると思っていた帰宅が早まったのだ。

「悠汰とはあまり接触するな。それだけでいい」

礼など要らないと、そう言う代わりに父親は釘を刺す。

この人には、何故俺がこんな事を仕出かしたのか、まだ理解できていない。

そんなことに易々と頷けるはずが無いだろう。

「今回のことに悠汰は関係ありません。もし、悠汰が俺に悪影響を与えられていたというお考えでしたら、それは逆なんです」

「くだらんな。逆におまえが悠汰に与えてるとでも言いたいのか？
実にくだらん」

以前ひしひしと感じていた殺意が、込み上げそうになる。暗黒の深淵しんえんから。

消さなくてはならない。

同じ過ちを繰り返すつもりはない。

「違います。悠汰が俺に与えたのは好影響だと言いたいです」
不快感を示すだけに止めとどめ、父親は何も返してこなかった。

* * *

それから暫くして、母親も退院した。

二人とも今までは比べ物にならないくらい、家に居る。

今後の俺の身の振り方を考え、なるべく自宅に帰るように、父親から母親に話がいったようだった。

それでもそれぞれが自室に入ったままで、家の中は暗く物々しい雰囲気になった。

それぞれが勝手に時間を潰しているだけの空間。

その中で、俺と悠汰だけはお互いに部屋を行き来していた。両親ともそんな状態だったためか、それを制限などはされなかった。

気になっていた。

今の状態が、悠汰にとって良いものなのか否か。

「解らない……」

今日も悠汰の部屋に入った俺は、だが別の意図をして言葉を発した。

「なにが？」

まさに今、何かの楽曲をダウンロードしようとしている悠汰は、振り向かないまま呟き返す。

「確かに片付けると言っただけだね……………」

あまり片付けや掃除が得意ではないらしく、悠汰の部屋はほぼ毎日物が散乱していた。

見兼ねて、昨日注意したところだった。

部屋中を見渡している俺に、ようやく悠汰がパソコンから目を離してこちらを見る。

「なぜ元の状態に、ここまでキッチリなおす必要性があるのか解らない」

母親が決めた配置。

それは俺の部屋も最初はそうだった。何とか言い包めて、俺は自由^くに維持し家政婦にも部屋には入らせないようにした。

けれど悠汰は従順だった。

そして、もうそんな縛りなど無くなったというのに、悠汰は片付けをした後でも、小物ひとつ変わらず元の位置にあったのだ。

俺には理解できない。

「慣れ、か？」

「さあな」

悠汰は俺の言いたい事が解ったようで、椅子から立ち上がり本棚に寄った。

「この疵^{きず}とか、俺が殴られてぶつけた時に出来たもんだよな。そういうのひとつひとつあって、確かに思い出したりするんだけど…。あまり良い思い出なくて、居心地も悪いんだけど、だからといって他の状態がもう想像できないんだ」

本棚の下のほうにある窪みをなぞりながら悠汰が言った。

どこか懐かしそうな顔を見せている。

懐かしさの中に、確かに在る、痛み。

「想像できないからといって、ここまで同じにするか？」

「考えたくないんだ。深みにハマるから」
「深み？」

「というか、何でもいいんだよ、俺は」
踏み込んで尋ねる俺に、悠汰は適当に返してきた。
興味が無いのだろうか。

少しでも居心地良くもつていこうという気が感じられない。
「思い切つて、すべてを変えてみたらどうだ？そこから少しずつ調整していけばいい」

「うーん…。ま、そのうちな」

そう言つと、悠汰はまたパソコンの前に落ち着いた。

俺はその隣のベッドに座り、横から見る。

「悠汰、おまえ……………。面倒なだけだろう」

「なんでバレンの？」

悠汰は眉をしかめた。

底が割れてるんだ、悠汰の考えることなど。

俺が呆れた顔をしていたら、暴かれた本人は背凭せもたれに寄りかかり、動かさない表情のまま軟質の声を出した。

「兄貴やつて」

「駄目だ。自分でやれ」

間髪入れずに返した言葉に自分自身、意外に思った。

今の俺ならば、何が何でも悠汰の重みを取り除きたいと思つただろうに…。

(影響、されたのかな)

このとき触発された人物を、思い出していた。

* * *

退院の時期が決まり、あと数日後にそれが待ち受けていたときだった。

初めて一人きりで西龍院玲華が病室に来た。いや、正確にはお付

きの女性が一人いたのだが、そうではなくて、いつもは悠汰と共に来ていたのだ。

少々…いや、かなり呆氣にとられた。

「ご退院おめでとうございます。お兄様」

彼女は綺麗な花束を持っていた。

女性が花瓶に花を活けるために病室を離れた。このためだけに、連れてきたのだろうか。

俺は半身を起こし、玲華さんはまわり込んで窓際にある椅子に座った。

「ありがとう、と言うべきかな？居るべき場所が変わるだけで、俺の拘束状況が変わると思えないけどね」

常に監視の目があった。

本来ならば検察の管理下の元に居るはずの身の上だ。

「大丈夫じゃないかしら。お父様が頑張っているとお伺いしましたわ」

大人っぽい眼差しで、玲華さんは切り返す。

悠汰といるときの彼女と、少しだけ印象が変わっていた。きっと

悠汰の前にいるときに、等身大の彼女ではないかと思えた。

彼女もまた、厄介な身の上にいるのかもしれない。

「聞いたのか…」

「ええ。貴方の担当弁護士、飯田雅孝先生いいだまさたかね、ちょっとした知り合いないんです」

「まさか…そんな凄い先生だったのか」

玲華さんが知り合い、というのならば、西龍院家と関わりがある人なのだろう。

そんな権威ある弁護士に目をつけた父親は、少なくとも濁った目を持ってはいないということになる。

あまり信じられないが。

「そんな大袈裟なものではないですわ。父がお世話になったことがあるんです。だから本家とは関係ありませんので」

「君に……、ずっと謝らないといけなと思った」

玲華さんに浅慕なことを言った。

幸せな家庭に育った君にはわからない、と。

これほどまでに別世界にいて、俺が知れることなど僅かなことではない。

悠汰がどこまで知っているかはわからないが、西龍院家は世界でも通用する巨大企業グループの筆頭だ。

その一族の直系である彼女にも、等身大よりも遥か上の人格を形成されることを、余儀なくされているだろう。

「あら、でも本当のことですもの。本当にいい家庭ですよ、うちはね」

艶かしく微笑む彼女に、それ以上突っ込めなかった。

別に含まれた何かをそこに感じた。

「ぬくぬくと育ってきた箱入り娘ですわ」

「君が？」

「貴方のお母様の言葉ですの」

「失礼な……」

家族の恥と言うのは母親のことを言うのではなかるうか。少なくとも俺は今そう体感している。

しかし玲華さんからは責めるようなものは感じなかった。皮肉さは、少々感じたが。

だから母親も良い意味では言っただろうと気づいた。

「ご心配無用です。あたしも同じくらい失礼なことを言いましたか

ら

「……………」

悠汰が修羅場だったと言ったことを思い出していた。

（いや、地獄だったか）

どちらにしても居なくて良かったのかもしれない。

「今日は、悠汰は？」

「久保田さんのところに置いてきました。あ、久保田さんってあの

探偵の人ね」

「なるほど。そこまでして俺と内緒話が出たかったと？」

「ええ」

彼女の目が鋭く光る。

「貴方は今後、どうなさるおつもりなのか聞きたくて」

俺の、今後　　？

意外な話だった。悠汰のことだと予測していたからだ。

「それは裁判官が決めることじゃないかな」

「ではそのまま、ただ時の流れに身を任せると？お父様があんなに頑張っている意味がなくなりますわね」

「そうではないよ。俺はどう足掻いても未成年だからね。いくら俺が反省の意を示そうと、決めるのは大人たちだ」

「そこですんなり受け止めてしまえる人では無いでしょうに……」

「心外だな」

思わず釈然としない想いを素直に出していた。

何を読まれているというのだ？数回しか会ってない女性に。

「いま貴方は生^{せい}への希望が薄いんじゃないかしら？悠汰が、両親が死ぬことを望んでいないと分かって、自分の殺意も……完全に消えたのかどうか、あたしには解らないけれど、とりあえず殺すことはもう思わない」

淡々と続けられた内容は、その艶^{つや}やかな声音にそぐわず、酷薄なものに俺には響いた。

「だから次の行動が何も浮かばないんじゃないかしら？とりあえず目の前にある判決の行方を見定めている。一応不利にはならない範囲で事は運んでいるものの、あまり必死さが感じられない。あたしにはそう見えて仕方ないのですが？」

「驚いたな……」

堪らず俺は本音を口にした。

鋭く、言い当てられた。それでこそ酷に響くのだ。

確かにずっと目標にしていたものがなくなつて、俺は考えあぐね

ていた。

何をしてもしゃめられない心情は以前からあったが、善悪関係なく目指すところがあれば、それは気にならなかった。

悠汰が解放されたのなら、俺がやるべきことはもう何も無い。何をしたいのかが分からない。

「悠汰が、今回にも上手くいかなかったって言ったんです」

「え？」

そつと目を伏せ玲華さんは続けた。

「なにひとつ、自分の力では満足いくようには出来なかったって。

彼も目標を掲げていたんです。過呼吸を克服すること、事件を解決すること、貴方を止めること。とりあえずその三つね」

「……………」

「だけどあたしにはそうは思えないの。形になるような成果がなかったのかもしれないけれど、確実に悠汰はこの件で変わったわ」

いつの間にか彼女の口調は真剣なものになっていった。それでこそ、余計なものである丁寧な飾り言葉を除いて口にする。

（ああ、そうか）

彼女の気になるところはいつもひとつだ。

悠汰の為になるかどうか。

「そうだね。俺を止めるということは達成できたんじゃないかな？ 結局悠汰が病室こむに来てくれたことで、俺は殺意を手放そうと思ったのだから」

俺がそう言っていると、玲華さんは深いため息を吐き出したのち、苦笑のような表情をうかがわせた。

「そういうことを、悠汰本人に言ってあげれば良いのに」

「改めて言う内容でもないと思うけれど」

「そんなことないわ、貴方たち兄弟は言葉が足りなさ過ぎるのよ。びしっという効果音がつくように玲華さんは言い切った。

これには俺のほう苦笑いをするしかない。

そうではなくて……。

「俺の殺意の話はもう、悠汰にはしない方が良いと思ったんだよ」
観念して本音を語る。

悠汰が一番取り乱したのはそのことだから。
心穏やかにいて欲しい。

二度とこんな家庭のことで呼吸が乱されないように。

それでも過去の心的外傷は、薄くなりはしても決して取り除かれるものではないことは判るから。

俺が親の偏執へんしつによる遺恨いこんを完璧には取り除けないのと同じように、
そして自分自身への過ちも、それ故にある罪の意識と心痛も、決してまっさらにはならない。

「結局、過保護なのよね」。そのへん。貴方も久保田さんも」

独り言のように玲華さんが呟いた。

(過保護?)

それは悠汰に対してだと解るが、考えに至らない部分であった。
そんなつもりはない。

「どうして腫れものにさわるような扱いしからないのかしら? その割には変なところ素直じゃないし」

「そんなつもりはないよ。けれど君にそう見えるということとは、まずあいつの不安を取り除くことが最優先だと思っからだろう」

「誰にだって不安はあるわ。例えば家庭のことが解決しても別のことで生まれてくる。そんなときお兄様が……いえ他の誰だってそう、常に一緒にいられるとは限らないのよ。ならば跳ね除ける強さが必要になってくるわ」

「ショック療法が必ずしも良いとは言えない。実際に精神が弱まると体に支障をきたしてしまっている。慎重に様子を見るべきだ」

否定心が俺から生まれた。そのまま考えるより早く胸中を曝さらけ出してしまっ。

適当に頷けない何かがあった。

いつものように対面者に話を合わせられない。冷静なバランスが取れない。

わかられたくない、と。

一年も満たない期間しか一緒にいなかった彼女に、何がわかる？俺は何年もあいつの弱まる姿を見せ付けられていたのだ。

無理に心を騒がせるような話題を出す必要は無い。

「精神鑑定が必要なのは、俺よりもあいつだ」

そうだろうか？

心神喪失になんて、俺はなっていない。

いくら父親がそれで少しでも刑を軽くしようと動いていても、納得できるものではない。それより悠汰に精神科を受診させるべきだ。

これからも呼吸が苦しくなるようなことがあるならば尚更…。

「随分、酷い言い方をするのね」

じろりと睨みつけ、玲華さんが怒りをあらわにしていた。

それで 我に返った。

(……しまった)

今更後悔しても遅い。

確かに戻りそうになっていた。

あの瞬間の神経に。本音の向こう側。

暗闇に引きずられないように、自ら制御しなければならぬ。

「すまない。心無いことを、言った」

「あたしに謝られてもね…」

「ああ、わかつてる」

自分がまいた種だ。精神鑑定に不満を抱いている場合ではない。

そして自分が楽になる為だけに、自分が嫌だと思つものを悠汰にはさせるようなことを言った。俺にはどうにもできないから、他人任せにしようとした。

思いやりがあまりにも無い。

これでは両親の怒りを悠汰に押し付けて逃げていた頃と同じだ。

「やっぱり似た者兄弟ね。反省が早いわ」

ふふ、と笑うと彼女は続けた。

「あたしだって、そうそう他人の家のことに口出ししたくないのよ。」

だけど、あまりに不器用だからもどかしいの。知ってる？第三者の方がよく見えることがあるのよ」

「どうするべきだと？」

「とりあえず貴方は普通の兄でいることね」

そのとき微笑んだ彼女は歳下には見えなかった。

「過度な優しさも、過度な拒絶もせずに、普通の良きお兄様で見守ってくれたら、それが一番自然だわ」

そうか。

彼女は本当は、この事を伝えたくて今日は来たのだ。

玲華さんの目を見てそう思った。

すでにそこには俺の失態を咎める色は皆無だった。

* * *

過保護はやめろ。

そういうことだ。

「ケチくせえ」

断った俺に悠汰は拗ねるようにぼやいた。

玲華さんはああ言ったけれど、実際にそうしようとしても何が普通の兄の姿なのか、すでに俺にはわからない。

普通ではない時の方が長すぎたせいだ。

「そう言うな。重い家具を動かす時だけは手を貸すから」

おそらく、それぐらいの感覚で良いんだろう。

本当に一人で出来ないときにだけ協力する。

そうだ。俺が何かを助けようと思うのではなく、それは協力なのだ。

対等に扱うこと。

それは悠汰が望んだものだったはずだ。

「兄貴はさ、いつまで……ここにいれるんだ？」

相変わらず直球で訊いてくる。

「それが決まるのがもうすぐなんだ」

判決がでるのが…。

そう答えたけれど、悠汰の質問はもつと漠然としたものではないのか、と思っただ。

いつか、家からは居なくなる。

悠汰にはそう感じられているのかもしれない。

確かに一般論として、子供はいつか巣立つ。年齢順でいけば俺が先だ。

心配しなくても、このままの状態で捨てたりしない。

そう付け加えようとしたとき、先に悠汰が口を開いた。頬杖をつきながら、呟く。

「池田さんは未成年だからもつと簡単だって言ってたのになー」

「……いつ？」

「最初」

かなりぶつきらぼうに答える。

恐らく俺が事情聴取を受ける前だろう。

確かに一時の、衝動的なものであればそれも有り得たのかも知れない。

しかし俺の仕出したそれには計画性がある。いくらその計画が叶わなかったとしても、そのことを認めている今、それが長年蓄えられた殺意だと教えているようなものだ。法的に見逃せるはずがない。真意は池田さん自身に確かめないと分からないが…。

「悠汰を心配させないように言っただろう」

「いや。んな人じゃねえ」

眉間に皺を寄せて、何かを思い出すように言い切った。

二人の間に、何があったのかは俺は知らない。

(でもたぶん…)

池田さんは過保護にしない人。そんな気がした。

「悠汰、おまえはどうしたい？」

ずつと躊躇われていたことを俺は訊く。

簡単には踏み込めないでいた。問題の核心にあたるどころ。

「このままでいいのか？」

この状態で満足か？

形だけは縛らなくなっている。今はまだ。

だが時間が経てばそれも分からない。

世羅は、悠汰のほしいものは家庭のぬくもりだと俺に話した。

それならば、今の状態は全くそれに沿っていない。

「それなんだけどさ」

悠汰が椅子を少し動かし、座ったままで改めてこちらに向いた。

僅かに緊張に満ちた顔で、決心を口にする。

「話し合い、しないか」

「話し合い？」

「まだしてないからさ。ちゃんと、家族全員で腹を割って話したい」

それは意外な内容だった。素直に驚いた。

これまでの悠汰は、なるべく家族の姿を見ずに動いていたのに。

逆鱗に触れないように、空気のように、息をひそめて。

(強くなった、のか)

玲華さんの言うように、保護するだけを考えていれば良いレベルではないということだろうか。

「大丈夫か？」

それでも、そう訊いてしまうのは俺の弱さだ。

確認せずにはいられない。

「ああ。玲華が言ったんだ。まずは俺の気持ちを伝えるって。それから、兄貴とタッグを組んで変えていけて」

「彼女は……、強いな」

「マジ、半端ない」

彼女との会話の内容を思い出しながら言うと、悠汰も深く同意した。

「だから負けないようにしないといけないんだ」

置いていかれないように。対等であるために。

(そういうことか)

「わかった。親父に話してみよう」
ならば俺は仲介する。

機会を作ることはできるから。後は悠汰本人に任せなければなら
ない。見守るだけのものとなるのだ。

【神崎家】（後編）

その夜は、父親が仕事で帰宅は深夜となったため、その次の日の夜に集まってもらった。

時間の都合が合わず、食事時間も揃わない。

そのため一家全員が集まったのは夜の十一時すぎだった。

先に両親がダイニングにいて、俺が悠汰の部屋をノックした。

現れた悠汰は、昨日決意を宣言したときより気を張り詰めさせていた。ピリピリとこちらまで伝わってくる。

「懐かしいよな」

先頭を切る形で先に階段を降りていると、後ろからそんな呟きが聞こえた。

全員揃うのが…、と言いたいのだろう。確かに家の中でもばらばらだったから、もしかしたら三年ぶりくらいかもしれない。

四人掛けのテーブル。

俺と悠汰が隣に座り、父親が俺と離れた位置に座りなおしたため、俺の前は母親だった。

母親とはあれからまともにも口を利いていない。怯えきった表情で、俺を見るようになっていた。そして視線は一度も合わせない。

父親からはそういうものは感じなかったが、座るとき距離をとられた気がした。何気に動作に現れる本音。

当然だ。

殺されかけたのだ。

悠汰でさえ、一瞬陥った心理状態だ。

「俺は許してないぞ」

まず、父親が先陣をきった。

前にも聞いた台詞。

「今後のことなど話しても無駄だ」

「なんでだよ、話し合わないと何も始まらないし終わらねえじゃん」

僅かに外側に体を向けるように座ったまま悠汰が弱く言う。
それに父親が反応した。

「終わらせたいのか」

「こんな状態はもう充分だ」

「……………」

無言で父親が悠汰を睨むように見た。

俺は見守るつもりだったが、気づけばつい口を挟んでいた。

「悠汰の言う通りだ。もう終わらせよう」

「俺は始まらないとも言っただけ……………」

「……………」

同じ調子で俺に言う言葉に、少し返す言葉を失う。

悠汰の本音が見えない。

終わらせたいのだと思っただのに。

もしかしたら、悠汰も迷っているのか？いや、それは不安か。

それでおまえはどちらを気にする。終わることをか　それと

も、始まることを？

「とにかくだな、俺は許してないぞ」

余程、念を押ししたい事実らしい。

これは俺に対して言われている言葉だ。

「許して欲しいとは思いません。もう俺に殺意はないから、別の方

法ではつきりさせたい」

悠汰が弾かれたようにこちらを向いた。

ああ、そうか。

殺意が無いこと、言っただけじゃなかった。

そして池田さんも玲華さんも伝えていなかったのか。

「別の方法？」

「話し合いは悠汰の希望ですが、まだ俺たちを縛るといふなら、こ

ちらもそれなりの対応を取らざるを得ない」

「縛る？それは違うな。これは教育だ。親の権利として」

「やり方がまずかったとは思わなかったんですか？」

「自分の過ちを俺のせいにするつもりか？」

「そうではない……………。俺は誰のせいにもするつもりはない。自分の罪からは逃げません」

「ならば大人しく家にいることだ。これ以上経歴に傷をつけるな」

「……………」

話を通じない。違う方へ話が持っていかれる。

あまりに異質な存在。重ならない。

「違うだろ。それじゃ今までの繰り返しだ」

「悠汰？」

あまりに今までとは違う強い声に俺は瞠目した。

本当に今、悠汰から発せられた言葉なのかと。

この両親の目の前で。

「責任とか権利とか、今はどうでも良いんだよ。それより、なあ、

この家がこれからどうなっていくか知りたいんだよ、俺は！」

「……………」

もう悠汰に緊張はない。

その目は強く、吹っ切れたような……………そう、殺意のあった俺に

立ち向かってきたときの眼差し。

父親も母親も悠汰を見ていた。

悠汰は交渉術なんて持ってない、と以前言った。あの地下室で。

だけど無視できない何かがある。

「もうやめようぜ。こんな半端な関係。気に入らないなら離れればいいし、それが嫌ならもう一度……………」

悠汰の声音が弱まった。

継続しきれないのが弱点、か？

変わりに俺が引き継ぐ。ここで惹きつけたものを手放したくない。

「わかりますか？父さん。母さん。悠汰は二人次第ではやり直すと
言ってるんです。本来なら見限られても仕方ない立場なんですよ」

「なんだと？お前ら何を結託している？いくら子どもが勝手気まま
に生きたいと願ってもそんなことは無駄だ！」

「わかつてるよ…。嫌なくらい…」

隣で小さく呟く声。

もしかして、なにか思い至ったのだろうか。

悟りを開いたのだろうか。

たとえこの家を出てもやがて必ず行き詰ることを。

悠汰は掌底を額に押し当て、どこか気怠けたるそうにしている。

呼吸の乱れは、ない。

俺には外側から受ける情報しかなかった。せめて、見落とさないように注視する。

「わたしは嫌よ！」

それまでずっと沈黙を通していた母親が声を荒らげた。

「終わるなんて嫌！離れたくない！別れないわ！」

「おまえ…」

「どうして…」

いきなり泣き出した母親に、父親も悠汰も驚いていた。俺にはなんとなく解っていた。

母親は未だに父親に未練があるのだ。しかし父親にすでに愛はない。

勝手な振る舞いをするのも、父親に振り向いてもらいたいから。

他に男を作るのも、そう。

醜悪な。唾棄たきしたくなる。

「だったら、努力しようぜ。それしかないだろ」

「あんたに何がわかるのよ！親の苦労も知りもしないで！呑気に遊んでいたら良いんだから。楽よね、対して勉強もしてないし。恋愛に集中してたらそれで終わりなのよね！」

これが、母親の言葉だろうか。

親というより女の台詞だ。そんなことで、子供に八つ当たりする女など母親失格だ。

「おまえは黙ってる！」

父親が一言で怒鳴ると、母親はそのまま泣きじゃくった。

「良いよ。話し合いなんだから。思ってること全部言えばいい」
悠汰が、また、許した。

泣いている母親に向かって。

(なぜそんなことが言える?)

今までどれだけの八つ当たりを受けてきたのか、忘れたわけではないだろう。

感情をぶつけるのは、どちらかと言えば悠汰側でなければならなかったはずだ。

今まで押し殺してきた分を。

「偉そうなことをっ！おまえはただ黙って俺の言う通りにしておけば良いんだ！」

「！」

言い終わらないうちに勢いよく立ち上がり、父親は悠汰の前に回り込んだ。

右の拳を振り上げて降ろすのが目に映る。

止めなければ、と思う前に間に合わないことを察知した。

しかし。

悠汰が捉えられることはなかった。

彼は咄嗟に左手でその腕を掴んでいたのだ。

条件反射。

いや、それよりも予想をしていたような素早さ。父親が来ることを。

「俺はもう、誰にも殴らせないし、殴らない」

低く、唸るような声を出すと、父親は驚きながらも腕を引っ込めた。

「言われたんだ…ある人に。暴力を解決に使うなって。………確か
にそういうところ、今までならあった。殴られて、怒りが収まるな
ら、それで良いって。それと逆に、殴って少しでも憂さ晴らしにな
ればって」

本気、か。

悠汰が本気を出せば見切ることは可能だったのだ。これまでも。

いつから上回ったのは知らない。

「でも俺はもう嫌なんだ。そういう表現の仕方は……それで分かり合えた奴もいたけど、それだけじゃ進めない。前に行けないんだ」
凜として顔を上げた。

「だからこれからは殴らせねえよ。たとえ上のやつらに絡まれても、俺はもう喧嘩はしない。別の解決方法を見つけてやる！」
絡まれる？

ふと、俺は過去の悠汰を思い出していた。

明らかに殴られた顔で帰ってきた時のことを。

「ちよつと待て。どういうことなんだ？絡まれたって」

「あ？いや、それはもう終わったことだから」

「終わったって……、確かおまえ謹慎処分つけていただろう」

「え、ちよ……、なんだよ今更」

確認するように訊く俺に、悠汰が多少戸惑っていた。

確かに時間は経ちすぎている。だが何も本人は説明しなかった。

(違うな、俺が聞かなかっただけだ)

聞こうとすら、しなかった。

「あれはおまえに非があったんじゃないのか？」

「確かに俺も殴ったけど」

「何があつた？」

「俺も知らないぞ！どういうことだ！謹慎だと？」

事情を聞こうとしている俺を遮りながらも、激昂していた。

父親は謹慎自体を知らなかったようだ。探偵にまで見張らせておいてこれか。

それに母親が立ち上がって叫ぶ。

「連絡したじゃない！だから帰ってきてって！メールしたじゃない！なんつかいも！」

「なんだと？メール？」

「あなた、まさか読んでもいなかっただっていうの!？」

母親がキツチンの方へ手を伸ばし、そこにあっただ夕食に使った皿を掴んで床に投げ落とした。

甲高い耳障りな衝撃音が貫く。

「おい、やめろ…!」

一枚では足らず、次々と割られていく皿をなす術も無く父親は茫然と見ていた。

いや、父親だけではない。悠汰も俺もすぐには反応できずにいた。ただ忌まわしく見ていることしか出来なかった。

「まだあの女と関係があるのねっ!!あの女!病院のっ!」

「なにを言ってる?おまえ、子どもの前で」

「こついうときだけ父親面しないで!あなたはどうせこの家のことなんて、もうどうでもいいんでしょ!」

「勝手な憶測でヒステリックに陥るな!おまえだって好き勝手にするだろ!」

「そうやっていつも大事なことは何も言わないのよね!でも否定しないってことはそういうことなのよね!」

「おまえっ…!」

両親の大喧嘩を見たのも久々ではあったが、ここまで経ってもそこに変化はなかった。進歩の兆しが見られない。

悠汰は青ざめていた。

この空間を作り出したのは自分だからと、無用な責任を感じているのだろつ。

「もういい!」

二人に負けないように声を鋭く放つ。

母親が怯えた顔を見せた。口論がびたりとやむ。

「そういう話しは二人でやってくれ!」

話し、ではないな。

言いながらも嘲り^{ほくそ}たい衝動に駆られていた。

俺だって同じだ。

こういう空気が耐えられなかった。もうずっと、昔から。

決して悠汰のせいにしてはいけけない。俺は、自分が逃げ出したくて壊したかったんだ。この家を。

「そうだ。まず謹慎のことを話せ」

父親がその隙に話を戻した。

まずい展開だと判断する。俺も知りたところだが、今更父親の怒りを蒸し返すことではなかったのだ。

制止の声を挟もうとしたけれど、耐えた。

悠汰が息を大きく吸い込み、何かしら口を開く気配を感じたからだ。

「売られた喧嘩を買ったんだ、結果的には。でも一人…主犯が謝ってきたし、もうしてこないとと思う。だからこれは終わったことなんだ」

「相手は誰だ？」

間髪入れずに父親が聞く。

「二年の、先輩」

追い詰められたように顔を歪ませながらも、悠汰は淡白に答えた。

「何人いた？」

「四人」

「やられたのか？」

「ああ。結果的には」

「ふん。情けない。その上巧妙に隠すこともできなかったのか」

愚弄する言葉を父親は投げつけた。最も悪い一面だ。

悠汰が傷つくこと。

知りながら、確かに俺もそうやって遠ざけていた。

子どもの頃に残っている記憶では、悠汰は人懐こい人格だった。

そつでもしないと、離れられなかったのだ。

だから、俺にはここで庇う資格は無い。

(俺はあの時どう考えていた?)

殴られた顔を見たとき。

どうせ、自暴自棄に陥って鬱憤を晴らしたのだろうと。

(それしか……)
なんていうことを。

事実を知らず、いつもの感情に任せての結果だと、そう思っていた。

「しょうが、なかったんだ……。あれは……」

「能が無いなら初めからしないことだな」

「だったらっ……、どうしろって！ 気を失った俺に、どうしろって言うっ……！」

はっとなって俺は立ち上がった。

気を失う、ということが引掛かった。衝撃の事実だった。

だがそんなことよりも。

限界、だと思った。

悠汰は言葉を途切らせ、胸の中心を押さえている。

俺は支えるように腕をまわした。

それに、大丈夫というように目だけで言うてくる。

確かにまだ過呼吸にまでは陥っていなかった。その一歩手前とどめている感じが見受けられる。でもどれほどの苦しきなのか、俺には判らない。

「どれくらいの謹慎だ？」

父親はこの姿が見えないのだろうか。

いや、昔から見ていた。見ていながら無視できる人なんだ。

「一週間……」

それでも、悠汰も答えた。掠れた声で。

「でもその間に逃げ出したのよ」

母親が告げ口をする。

(最悪だ)

俺から傷口を開くような、余計な切り口をしてしまった。

まだ一人座っていた悠汰をそのとき父親が立たせた。俺の腕を弾き、胸ぐらを掴んで。

抵抗を許さない力だった。

「まだ俺から罰を与えてないな」

「やめろ！」

あっさり離してしまった自分を悔やむ。

「おまえもだ。おまえにも罰を与える！」

「貴方にはさせない！」

悠汰を離さないまま俺を睨みつける父親に、鋭く言い放った。

「悠汰は充分罰は受けている。だからこそ学んで変わろうとしているのに、それに気づかない貴方に裁く資格は無い！！」

「兄貴……」

俺は強引に父親の腕を引き剥がした。

庇うように後ろに悠汰の身を置く。

「生意気なことを！自分のことを棚にあげて……！そうやってうやむやにしようという魂胆だろう！」

「俺の過ちと悠汰のことは別だと言っているでしょう。付随させて考えるからおかしくなるんだ」

どういふ風に言えば、どんな言葉で表せば、この人に伝わるんだらう。

根本的なところで違う方を見ているから、それは容易ではない。

そのとき、俺の肩を悠汰が軽く叩いた。

そして前に出る。

「ありがとう、兄貴。俺も成長ねえな。庇われてばかりでさ」

「悠汰……」

まただ、と思った。

また予測を超えた行動を悠汰はしている。

言葉とは裏腹にその強い双眸は、まだ諦めていなかった。父親の理解を。

「父さん」

そして、何年ぶりに彼は父親のことを呼んだ。

「まだ、父さんの気持ちを聞いていない。こんな状態になって、こ

れから父さんはどうしたい？どういう方向を見てる？」

静かな声だった。

まるで彼の方が上の立場にいるように見える。

「……おまえだって、言っていないぞ」

唸るように父親が切り返す。

俺も悠汰を見た。知りたくて。

「俺は……出来ることなら、やり直したい。普通の　普通って
どいうのかわかんねえけど、それぞれ違うんだろうけど、俺たち
には俺たちなりの、家族でいたい」

一旦言葉を切った。

探りながら伝えている感じがした。

父親は間に何も挟まない。

「ちゃんと一個人として、見てほしいんだ。信頼してほしいって、
今までなら思ってたけど。確かにまだ信頼してもらえないほどのこと
は何もしていないから……。だから、これからの俺を見ていてほしい。
その上で叱られるんなら、俺はちゃんと受け止めるよ」

悠汰はしっかり言い切った。呼吸を乱すことなく真情を吐露した。
俺の役目はもう何も無いのだと気づいた。

強くなる。支えなど不要なくらい。

独り立ちに一步近づいたのだ。

(寂しいと思うのは俺の勝手かな)

今からでも普通の兄になれたなら、と思うのは遅すぎるのか。

悠汰を蔑み、遠ざけながら俺も見ていることしかやらなかった。

世羅にはそう伝えたとき、良い方へ誤解をされたのだけれど…。

『そうやって貴方は守っていたのでしょう？なるべく親の機嫌を貴
方が整えていた。だからこそ神崎は、今も持ちこたえている』

それはただの自己欺瞞だよ。

『しかし貴方がいなければ、彼はもっと殴られていたのかもしれない』

い。それに貴方は置いて逃げたというが、それは両親が離れてからではないのか？」

悠汰にとつてはどちらにしても同じことだ。周りを見ようとしていないと君は責めるけれど、誰も……教えてやれる人すら、いなかったんだ。それは悠汰の責任ではないから。

彼女のように達観することなど、そうそう出来るものではない。とくに悠汰には。

彼女には玲華さんがいたけれど、子供の頃の悠汰には誰もいなかった。

自分自身を護ることで精一杯だったんだ。

『それならわかる。私も玲華と離れてからかなり辛くなった。だから今はこの計略こくごに必死になるんだ』

そのときは、まだ我々の野望を周りに知られてない頃。

そう言つて笑つ世羅は、本当に切なかった。

出来ることなら叶えてやりたかった謀はかりごと。彼女も、解き放つてあげたかった。

しかし二兎追うものは一兎も得ない。

「ふん、生意気なっ」

父親が悠汰に吐き捨てた。

しかし顔を横に向け、躊躇っている様子が窺えた。

そして。

「少し………考える時間をくれないか？」

そう言つとダイニングから自室へと帰って行ってしまった。

俺は冷めた脳で見送る。

この期に及んで逃げの体勢か。

静寂な空間になって、母親が気まずそうに割れた皿を片付け始めた。

それに悠汰が近づく。手伝おうと手を伸ばした。

「触らないで！」

母親は拒絶で返した。悠汰がビクリと止まる。

俺は変わらない両親の態度に、半ば呆れながら立ち上がった。

「行こう悠汰」

「でも……」

「ここは任せればいい」

強引に悠汰を促す。

そしてダイニングから悠汰の部屋に戻った。

悠汰は何度か母親の姿を振り返り、そして一階の父親の部屋にも

視線を送っていた。

心配しているのが分かる。

「あまり、意味はなかったな」

俺も悠汰の部屋に入り、そう切り出した。

「そう思う？ 兄貴は」

悠汰はベッドの前の床に直に座り、俺を見上げた。

「悠汰にはどう見えた？」

反問して俺も左隣に座る。

「わかんねえけど……、今までと違ったのは確かだと思う」

「違った？」

「そう、怖さのレベルが」

「それは悠汰が強くなったんだろう」

「んなことねえよ、見るよコレ」

そう言っつて左の掌を俺に見せるように広げた。

震えていた。

指先まで細かく。

全く気づかなかった。見落としていた。

「怖かったのか？」

「怖い、というか、緊張だと思う。実際にはそんなに怖くなかった

んだ、父さんは」

やはりなにかしら乗り越えていたのだろう。

本人は否定するが。

「悪かったな。俺が変なところで引つ掛かって」

本人としては本当に収束した事柄だったのだ。

「まあ、ちよつと驚いたけど。世羅に聞いているんだと思っていた」

「彼女には…暴力事件を起こして一週間の謹慎になったと…」

「ああ、そうか。あいつはあの場にいなかったな」

思い出すように悠汰は言う。

「気を失った、と言ったな？酷いことをされたのか？」

「べつに普通。呼吸ができなくなつて…反撃出来なくなつただけ」

かなり投げやりに答えていた。

こんなときでも、もとを正せば両親の被虐が影響している。

「それも、悪かった。本来ならあの瞬間に聞くべきだったんだ。遅すぎるな」

普通の兄としては、すべてを聞き慰みの言葉を、もしくは力づける言葉をかけてやるものだろう。

今から案じたところで……。

これは報いだ。

別の罪。

「いいよ。助けてくれた人いたし…それにさ、本当にどうでも良いんだ、そのことは」

何でもないように悠汰は首を横に振る。

どうでも良くないことが、他に沢山あれば、人にとっては辛いことでも軽く考えるようになるらしい。

「でも嬉しいよ。今からでもそう言つて貰えるのは」

「おまえ……」

「なあ。兄貴がどうしたいのか…俺、聞いてない」

唐突に悠汰が核心を突いてきた。一瞬、反応が遅れる。

玲華さんには見抜かれた内容を、そのまま悠汰に伝える訳にはいかなかった。

「俺はおまえが笑っているならそれで良いよ」

「なんだよ、それ」

何故か不満そうに悠汰が呟く。

「だったら医者の本気でなりたいものか？」

「別になってもいいと思ってる。これまでその為の知識を叩き込んだから。一番身近な将来ではあるな」

「兄貴…。そのセリフ、本っ気で医者目指してるヤツの前で言うなよ」

眉間に皺を寄せながら、悠汰はこれ以上ない仏頂面になった。

「すっげえ嫌味に聞こえると思う」

「悠汰に心配されては俺も終わりだな」

「なに言ってるんの？」

変わらない表情のまま、ぼつりと悠汰は返した。

(こつやつて会話することが、当たり前だと思っではいけない)

罪は消えていないのだから。

悠汰が許しているからこそ、可能となっている状態だ。それを忘れてはならない。

「悠汰は？何になりたい？」

「……………言ってもいいけど、笑うなよ」

念を押して、そして。

「刑事か探偵」

「……………」

笑いはしなかったが、俺は返す言葉を失った。

あまりに対極。

そしてそれは明らかに今回のことで影響されているものだ。

「あーやつぱり呆れてるよ」

「そんなことないよ」

「嘘だろ！おまえには無理だとか思ってたんだろ！」

ベッドの高さを背凭れに利用して、俺とは反対側に身を預けた。

そこで拗ねるから揚げ足を取られるのだということに気づいてないようだ。

そして俺は現実的なことを告げる。

「探偵はともかく、刑事はどうかな」

「え？」

「身内に犯罪者がいたら、警察官にはなれないと聞いたことがある。

身辺調査をされて」

悠汰がこちらを向く。驚愕の表情で。

「まさかこんな形で俺が悠汰の足を引つ張るとはな

」………」

ようやく悠汰が前を向いて行こうとしているときですら、俺は力になれない。それどころか、それを止めてしまう。

歯痒い。悔しくてたまらない。

「やめろよ、そんな言い方」

低く唸るように悠汰が嫌悪感を表した。

何故だ？

責めればいいじゃないか。おまえのせいだと。

これまでのことも全部、糾弾すればいいじゃないか。

俺だけではなく親にも。

おまえが詰なつていい人間がここにいるのだから。

「俺のなんてただの気まぐれなんだよ。最近軽く思っただけなんだ

よ！んな深刻に受け止めてんじゃねえ」

「確かにただの噂だ。ちゃんと調べて話すよ」

「あと、犯罪者って言葉もイヤだ」

悠汰は胡座あぐらを組んでそっぽを向く。

（事実だよ、それも）

たとえ未遂とはいえ、殺人したのと同様の罪がある。気持ちの上では同じだ。未遂に終わったのは結果論でそれが薄れることはない。

「まあ、悠汰には逆永久就職があるか」

わざと。

話を逸らした。

「あ、兄貴までそういうことを……」

「玲華さんとはどこまでいってるんだ？」

「うるせえ！答えるか！」

真っ赤になつて悠汰が怒鳴った。

まだ可愛げが残っている。先に置いていかれるとそれはそれで困るから、有り難かった。

「じゃあ兄貴は世羅のことどうすんだよ」

仕返しとばかりにそう切り返す。

「諦めんのか？」

あまり触れてほしくなかったところだ。

気づかれていたことに驚きはなかった。醜態を晒した自覚はある。しかし彼女は俺のことをそうは見えていない。それは嫌なくらい判るものだった。

「こういう会話は、普通の兄弟はするのか？」

ぼつりと疑問をぶつける俺に、また悠汰は怒鳴る。

「自分から聞いたんだろ！いいんだよ、なんでも！普通じゃなくても！」

「そうかな」

「だから言っただろ！ここにいる全員、とつくに普通なんてわかつてねえんだから。どこかの基準を真似する必要なんてないんだよ！」

「では俺が例えば……」

俺が喋っている途中で、いきなり部屋のドアが勢いよく開かれた。

「うるさいのよ、二人とも！何時だと思ってるの！ご近所迷惑よ！」

悠汰の怒鳴り声よりもうるさい声で、それだけで、母親はドアを閉めた。

耳障りなものだった。いつもの金切り声で。

俺はギリッと歯を食いしばった。

けれど。

はっと気づいて横を見た。

悠汰が、右手で両目を覆い膝に顔を押しつけていた。肩が震えている。先ほどの掌と同じように。

二人ともって、言ったから、だ。

母親がまとめて扱った。

それは母親の中で俺の存在が格下になったからに外ならない。それでも、悠汰の中でそれは関係なかった。

(ああ、そうだったな……………)

対等に扱われることを、悠汰は望んでいたのだ。ずっと、長い間。分かっているつもりでいた。これまでの悠汰の反応から。

でもそれは、つもりだけだったのだと、今の悠汰を見て感じた。

(例えば俺が)

先ほど言いかけた言葉。

(いまだけ兄貴面をしても、悠汰は許してくれるのか)

何が普通の兄で、どこからか過度のものかは判らない。

今更そんな権利があるのかも知らない。

だけど俺は、いまだけは素直に、泣いている悠汰を支えるように、慰めるように、頭から抱きよせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5994n/>

come with tomorrow ~番外編~

2011年3月27日20時11分発行